

学内六報

2015.3.18

no. 1465



特別号

東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、教育企画室の委託を受け、卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施している。今年度は第6回目にあたり、平成26年3月に平成25年度の卒業生3,133名を対象として実施し、2,537名から回答をいただき、回収率は81%であった。調査の実施には各学部にも多大な協力をいただいた。調査にご協力をいただいた各学部と学生みなさんに御礼を申し上げる。また、関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

この調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に、東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善にさまざまな形で活用している。先にも述べたように、本調査は、本年度で6回を数えた。このため、本報告書では、過去6回の調査で回答の傾向が変化している質問項目について、その推移を検証した。今後よりいっそうの分析を続け報告していく予定である。

今回は6回目の試みであり、回収率は上昇しているものの、依然として学部によってかなりのばらつきがあり、全体の傾向としてみるためには留意が必要である。今後も、調査を改善し、来年度以降も実施していくことになっている。本報告書に関しても、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と今年度卒業される学生諸氏の調査へのご協力をお願いしたい。

平成27年2月
大学総合教育研究センター長
吉見俊哉

調査実施方法

- アンケート配布日 : 平成26年3月25日(卒業式)
- 2014年3月卒業生数 : 3,133名
- 有効回収数 : 2,537票
- 回収率 : 81.0% (回収率は、有効回収数 / 卒業生数 で計算した)

※学部(各学科)が、卒業式後の書類配布時に調査票を配布、回収した。

※グラフの個々の数字は、小数点以下を四捨五入しているため、数字を合計して100%にならない場合がある。

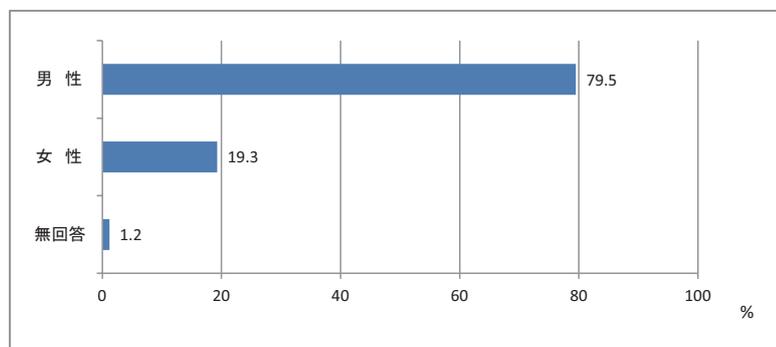
回収率

2014年6月20日現在

	2008年度			2009年度			2010年度			2011年度			2012年度			2013年度		
	卒業生数	回収枚数	回収率	卒業生数	回収枚数	回収率	卒業生数	回収枚数	回収率									
法学部	433	152	35.1	409	156	38.1	398	32	8.0	425	407	95.8	407	395	97.1	427	387	90.6
医学部	133	23	17.3	129	19	14.7	109	20	18.3	121	18	14.9	124	112	90.3	124	121	97.6
工学部	907	93	10.3	925	437	47.2	943	681	72.2	978	631	64.5	950	630	66.3	967	669	69.2
文学部	336	42	12.5	291	263	90.4	370	265	71.6	352	272	77.3	360	303	84.2	361	294	81.4
理学部	305	225	73.8	277	202	72.9	293	228	77.8	318	240	75.5	282	239	84.8	282	203	72.0
農学部	279	258	92.5	272	247	90.8	267	245	91.8	279	257	92.1	266	233	87.6	267	234	87.6
経済学部	349	275	78.8	359	330	91.9	358	349	97.5	333	304	91.3	329	287	87.2	334	292	87.4
教養学部 (後期課程)	165	35	21.2	141	25	17.7	184	21	11.4	154	144	93.5	186	148	79.6	186	158	84.9
教育学部	96	40	41.7	102	29	28.4	101	20	19.8	110	105	95.5	99	96	97.0	99	99	100.0
薬学部	90	84	93.3	78	73	93.6	78	75	96.2	91	90	98.9	86	81	94.2	86	80	93.0
合計	3093	1227	39.7	2983	1781	59.7	3101	1936	62.4	3161	2468	78.1	3,089	2,524	81.7	3133	2537	81.0

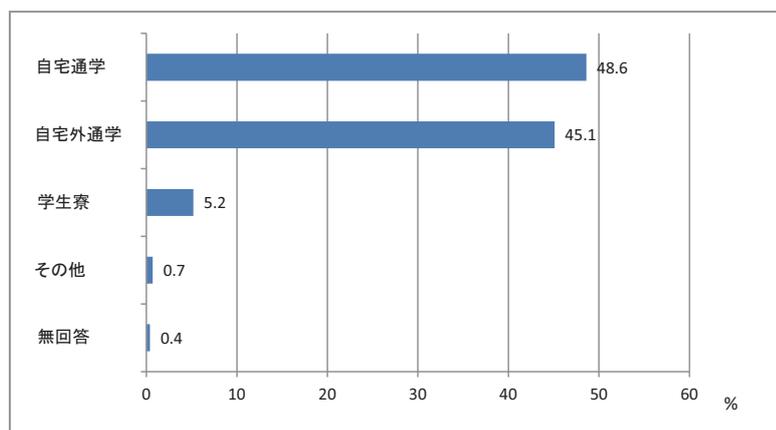
回答者の特性

Q 5 性別



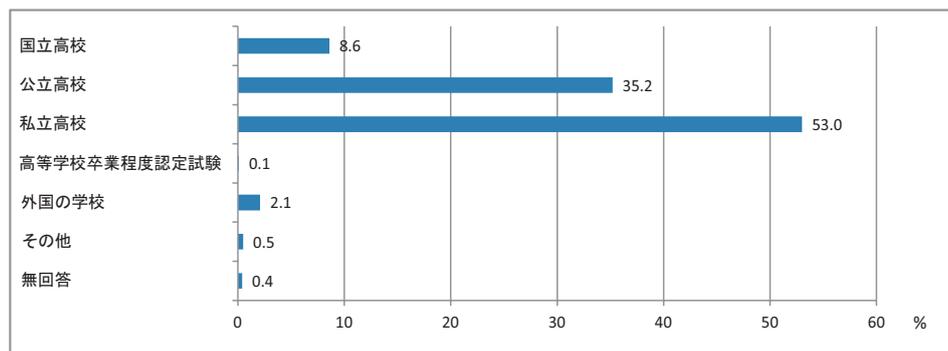
回答者は男性が8割（79.5%）、女性が約2割（19.3%）となっている。

Q 6 通学



回答者のうち、自宅通学は48.6%、自宅外通学は45.1%で、学生寮は5.2%と少ない。

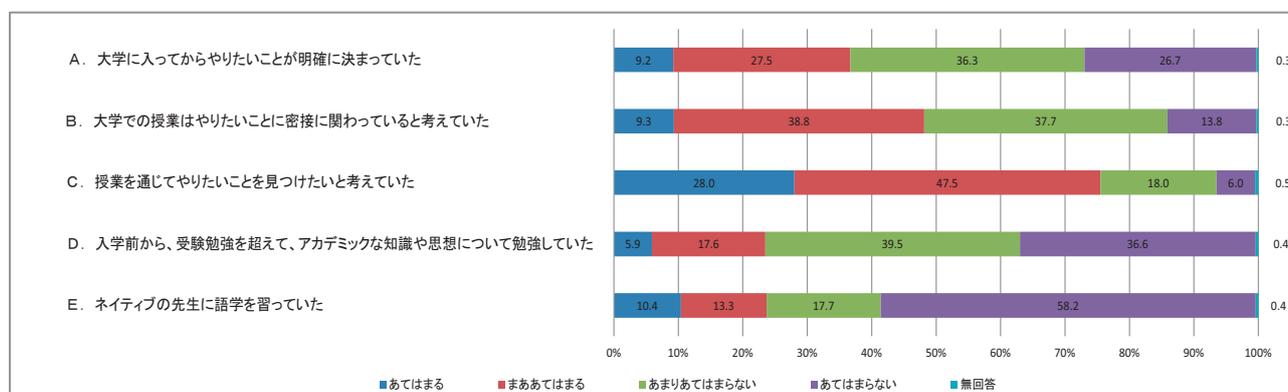
Q 7 出身高校等



回答者のうち、過半数（53.0%）は私立高校出身で、次いで公立高校が35.2%、国立高校が8.6%となっている。また、外国の学校は2.1%となっている。

やりたいことが明確：約4割、授業を通じて見つけたい：4分の3

Q 8 入学時の様子についてお聞きします。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。

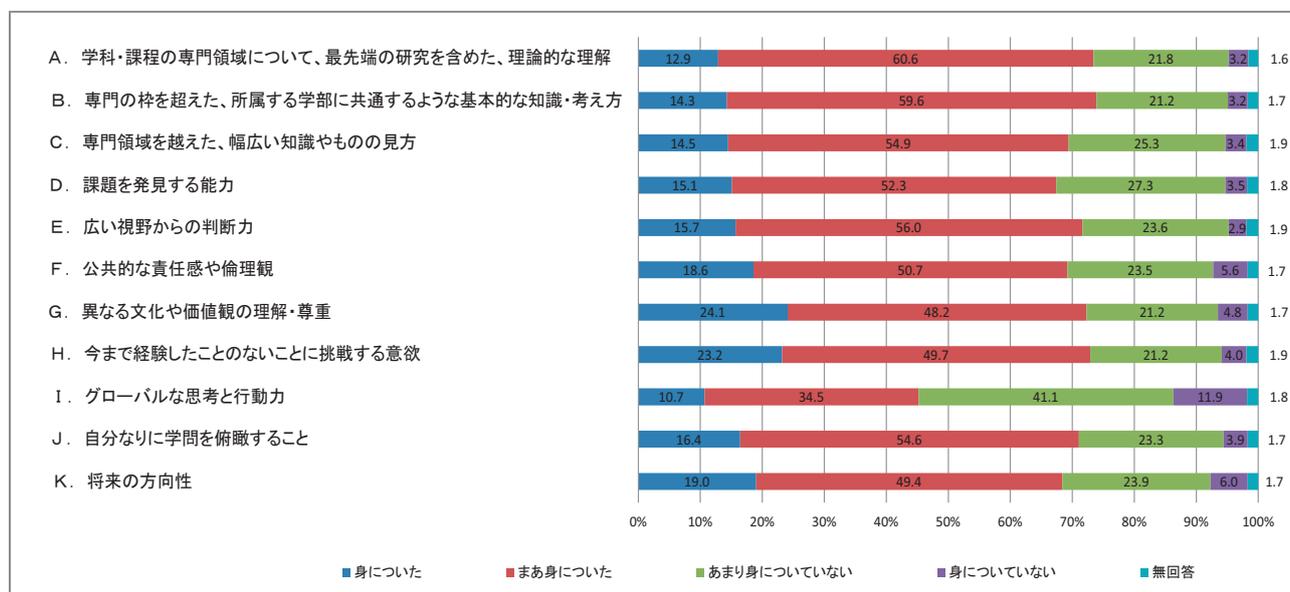


「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」（「あてはまる」9.2%と「まああてはまる」27.5%を合わせて36.7%、以下同じ）や「B. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっていると考えていた」（48.1%）者はいずれも半数以下で、「C. 授業を通じてやりたいことを見つけれたいと考えていた」が4分の3（75.5%）と、入学時には、東京大学の教育の特徴である late specialization に沿った学習志向性を持っていた。これに対して、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」（23.5%）や「E. ネイティブの先生に語学を習っていた」（23.7%）と、入学以前に受験以外の学習をしていた者は、4分の1未満となっている。

「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は2008年度は「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」30.5%で合わせて40.5%であったが、やや減少傾向にあり2013年度は36.7%となっている。同じように、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者の割合は2008年度は「あてはまる」6.3%、「まああてはまる」19.4%で合わせて25.7%であったが、やや減少傾向にあり2013年度は23.5%となっている。こうした時系列の変化については、後に詳細に検討する。その他の項目について、こうした時系列の変化に傾向性がない。以下では、とくに目立った傾向がないものについては、特に記載しない。

「最先端の理論的理解」、「学部に通ずる基本的な知識・考え方」、「幅広い知識やものの見方」、「広い視野からの判断力」、「異なる文化や価値観の理解・尊重」、「今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」、「学問を俯瞰すること」を身につけた者は7割前後、「グローバルな思考と行動力」は4割強

Q 9 あなたは、東京大学の教育を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

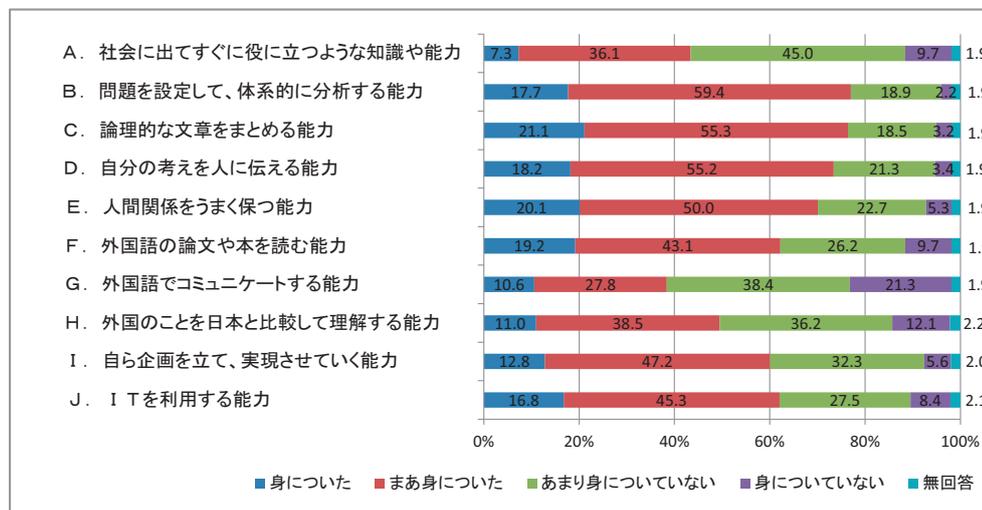


東京大学の教育を通じて身につけた能力では、「B. 専門の枠を超えた、所属する学部に通ずるような基本的な知識・考え方」（「身についた」14.3%と「まあ身についた」59.6%で合わせて73.9%、以下同じ）、「A. 学科・課程の専門領域について、最先端の研究を含めた、理論的な理解」（73.5%）、「J. 自分なりに学問を俯瞰すること」（71.0%）、「C. 専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」（69.4%）、を身につけた者は7割前後となっている。これらは毎年度ほとんど変化していない。

2013年度より新たに、学部教育の総合的改革の中で育成する能力・人材に関わる、次のような項目をたずねた。以下、「身についた」とする者の高い割合を見ると、「H. 今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」（「身についた」23.2%と「まあ身についた」49.7%を合わせて72.9%）、「G. 異なる文化や価値観の理解・尊重」（「身についた」24.1%と「まあ身についた」48.2%を合わせて72.3%）、「E. 広い視野からの判断力」（「身についた」15.7%と「まあ身についた」56.0%を合わせて71.7%）は7割をこえている。次いで、「F. 公共的な責任感や倫理観」（「身についた」18.6%と「まあ身についた」50.7%を合わせて69.3%）と「D. 課題を発見する能力」（「身についた」15.1%と「まあ身についた」52.3%を合わせて67.4%）は3分の2以上となっている。これに対して、「I. グローバルな思考と行動力」（「身についた」10.7%と「まあ身についた」34.5%を合わせて45.2%）については、身についたとする者は半数以下となっている。

外国語の論文や本を読む能力が身についた者は6割以上 外国のことを日本と比較して理解する能力は半数、外国語でコミュニケーションする能力が身についた者は約3分の1

Q 10. あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。



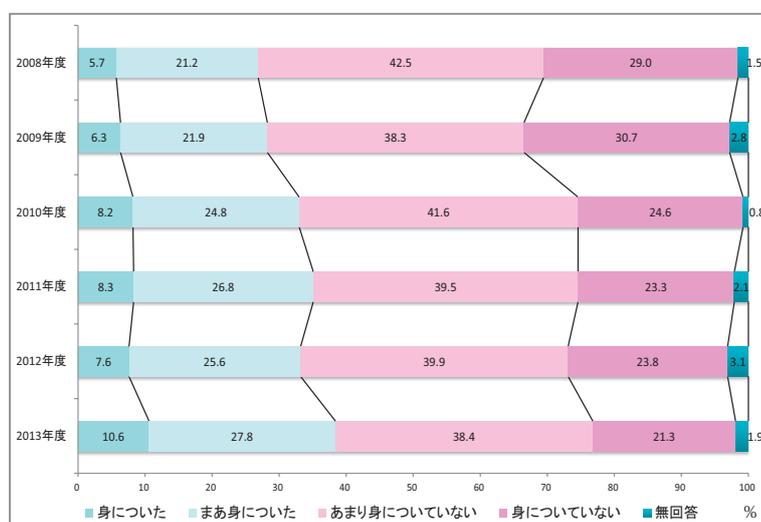
学生が大学時代を通じて身につけたとしているのは、「B. 問題を設定して、体系的に分析する能力」（「身についた」と「まあ身についた」を合わせて77.1%、以下同じ）、「C. 論理的な文章をまとめる能力」（76.4%）、「D. 自分の考えを人に伝える能力」（73.4%）、「E. 人間関係をうまく

保つ能力」（70.1%）といった汎用性の高い一般的な能力である。

これに対して、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」が身についたとしている者は約4割（43.4%）に過ぎない。他方、「F. 外国語の論文や本を読む能力」は約6割（62.3%）の者が身についたとしているのに対して、「H. 外国のことを日本と比較して理解する能力」は半数（49.5%）、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」が身についたとしている者は約3分の1（38.4%）に過ぎない。しかし、いずれも昨年度より身についたとする者の割合がわずかではあるが高くなっている。

外国語でコミュニケーションする能力が身についた者は少しずつ増加

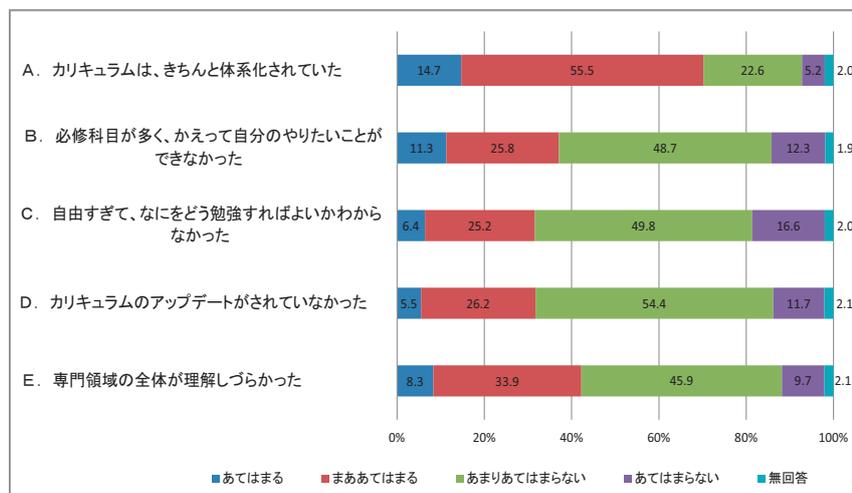
「Q10 G. 外国語でコミュニケーションする能力」の推移



とくに、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」については、わずかではあるが、身についたと答えた者の割合が年々高くなってきていた。しかし、2012年度では、わずかではあるが、2011年度より、身についたと答えた者の割合が低くなっていった。しかし、2013年度は、再び増加に転じている。とくに「身についた」者のみの割合は2008年度の5.7%から2013年度は10.6%と、2008年度に比較して約2倍増加している（時系列の傾向については後述）。

カリキュラムについては肯定的な回答が多いが、約3割の者は評価していない。特に「専門領域の全体が理解しづらかった」という者は約4割

Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。



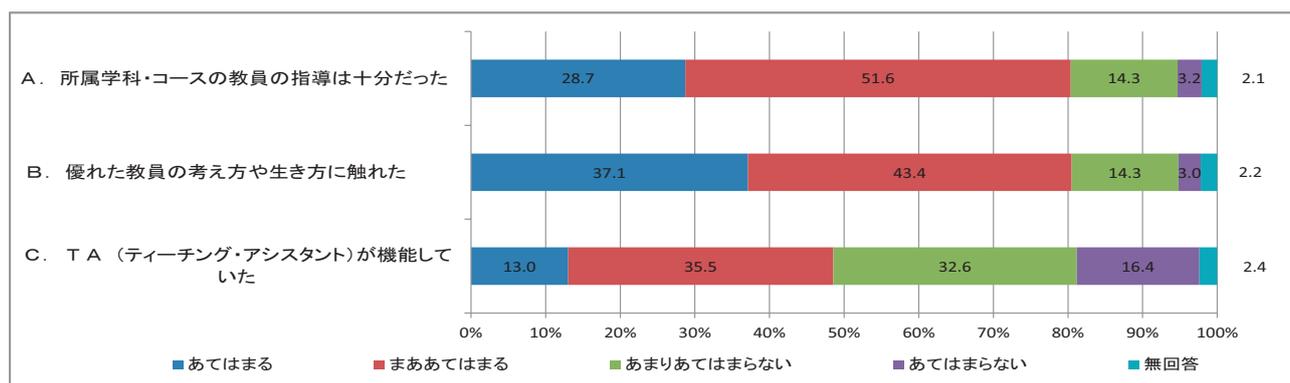
カリキュラムについては、「A. カリキュラムは、きちんと体系化されていた」とする者が、70.2%（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせた回答、以下同じ）と7割となっている。他方、「B. 必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」（37.1%）、「D. カリキュラムのアップデートがされていなかった」（31.7%）、「C. 自由すぎて、

なにをどう勉強すればよいかわからなかった」（31.6%）という否定的な項目については、約3割であり、全体として約7割の者は肯定的に評価している。しかし、「E. 専門領域の全体が理解しづらかった」という者も約4割（42.2%）となっている。

とくに「B. 必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」者の割合は年々増加傾向にある。

8割の者が「教員の指導は十分」、「優れた教員の考え方・生き方に触れた」

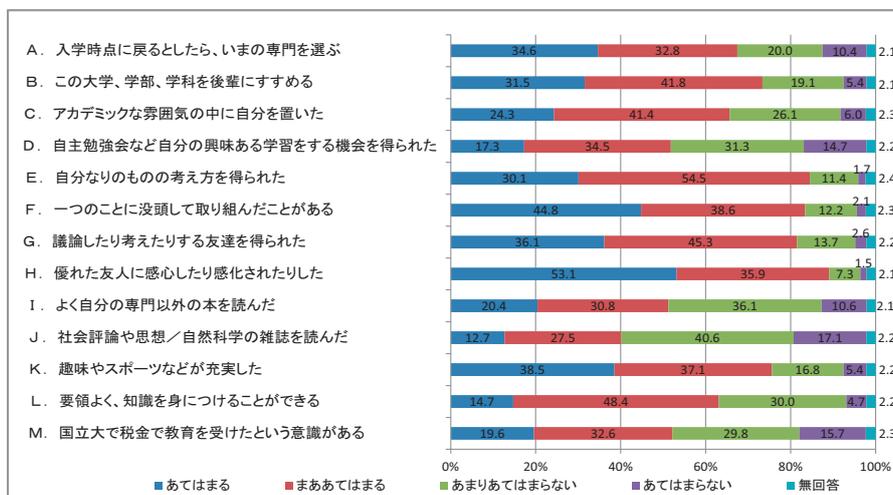
Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。



「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」（80.3%）と「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」（80.5%）が8割となっている。反面、「C. TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」と評価するのは48.5%と半数以下となっている。しかしながら、いずれの項目も2012年度よりわずかに増加している。とくに、「TAが機能していた」は、増加傾向にある。

「友人から感化」：約9割、「自分なりのものの考え方の習得」、「一つのことに没頭」、「友人と議論」：約8割

Q13 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。

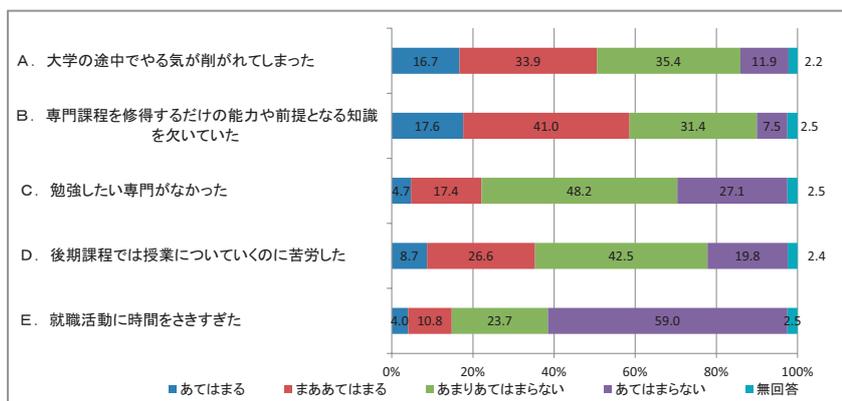


大学時代の経験として最も高く評価されているのは、「H. 優れた友人に感心したり感化されたりした」（「あてはまる」53.1%と「まああてはまる」35.9%で合わせて89.0%、以下同じ）、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」（84.6%）、「F. 一つのことに没頭して取り組んだことがある」（83.4%）、「G. 議論したり考えたりする友達を得られた」（81.4%）で、

8割を超えている。ただし、「A. 入学時点に戻るとしたら、いまの専門を選ぶ」（67.4%）と「B. この大学、学部、学科を後輩にすすめる」（73.3%）はやや少なくなっている。また、「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」（51.2%）は約半数、「J. 社会評論や思想／自然科学の雑誌を読んだ」（40.2%）者の割合は、約4割である。他方、「M. 国立大で税金で教育を受けたという意識がある」（52.2%）という者も約半数になっている。とくに、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」、「G. 議論したり考えたりする友達を得られた」、「H. 優れた友人に感心したり感化されたりした」、「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」、「J. 社会評論や思想／自然科学の雑誌を読んだ」は、年々わずかではあるが減少傾向にある。

半数の者が「大学の途中でやる気が削がれてしまった」

Q14 あなたは、大学時代につぎのような経験がありましたか。

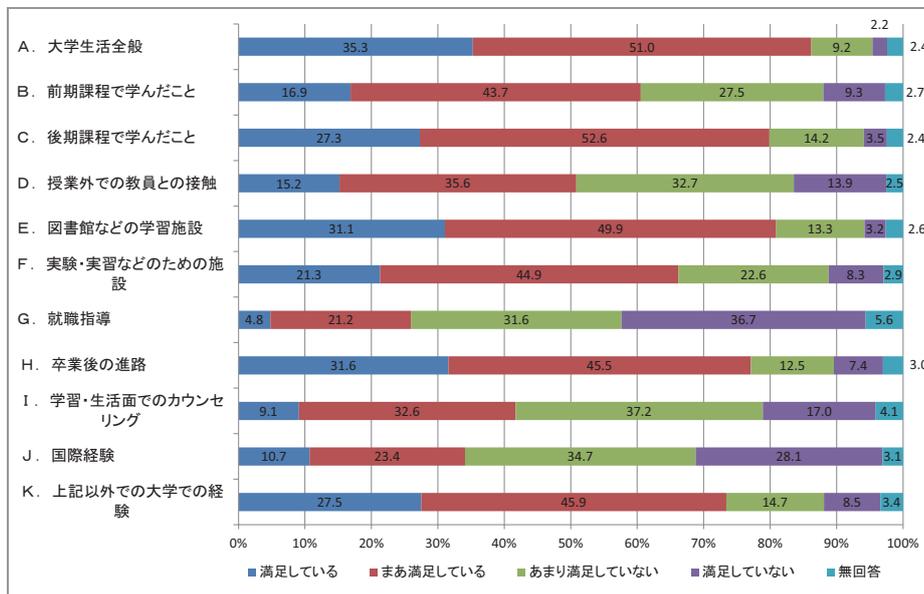


大学時代の否定的な経験としてあげられたのは、「B. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」（「あてはまる」17.6%と「まああてはまる」41.0%で合わせて58.6%、以下同じ）で、約6割があてはまるとしている。また、「A. 大学の途中でやる気が削が

れてしまった」（50.6%）者も半数になっている。なお、「E. 就職活動に時間をさきすぎた」（14.8%）については、4月からの予定（Q26）を「働く」（後述）とした者に限ると27.1%となる（グラフ省略）。「B. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」は年々増加傾向にある。いずれも2012年度よりやや減少している。

満足度：「大学生活全般」8割強、「前期課程」約6割、「後期課程」約8割 「就職指導」への満足度は低いが、「卒業後の進路」については約4分の3が満足

Q15 あなたの大学生生活を通じた満足度についてお聞きします。

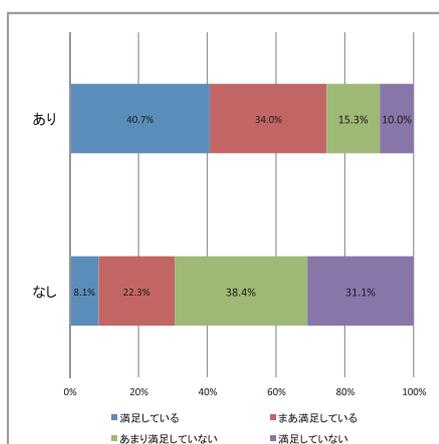


「A. 大学生活全般」に満足している者は「満足している」35.3%と「まあ満足している」51.0%を合わせて86.3%と8割をこえている。「B. 前期課程で学んだこと」(60.6%)は約6割、「C. 後期課程で学んだこと」(79.9%)は8割、「H. 卒業後の進路」(77.1%)は約4分の3が満足している。満足度が低いのは、「G. 就職指導」(26.0%)で約

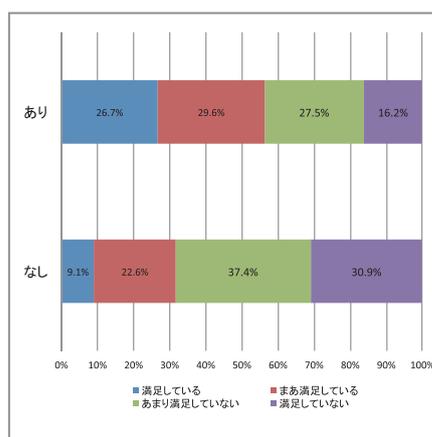
4分の1の者しか満足していない。とくに、卒業後の進路(Q26、後述)による差も見られない。「I. 学習・生活面でのカウンセリング」(41.7%)も4割の者しか満足していない。「D. 授業外での教員との接触」(50.8%)についても、満足している者は約半数に過ぎない。さらに、「J. 国際経験」の満足度は、合わせても約3分の1(34.1%)にすぎない。ただし、2011年度の28.3%、2012年度の28.5%よりやや増加傾向にある。

留学経験者の「国際経験」の満足度は高い

「Q21 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q15 J. 国際経験」の満足度



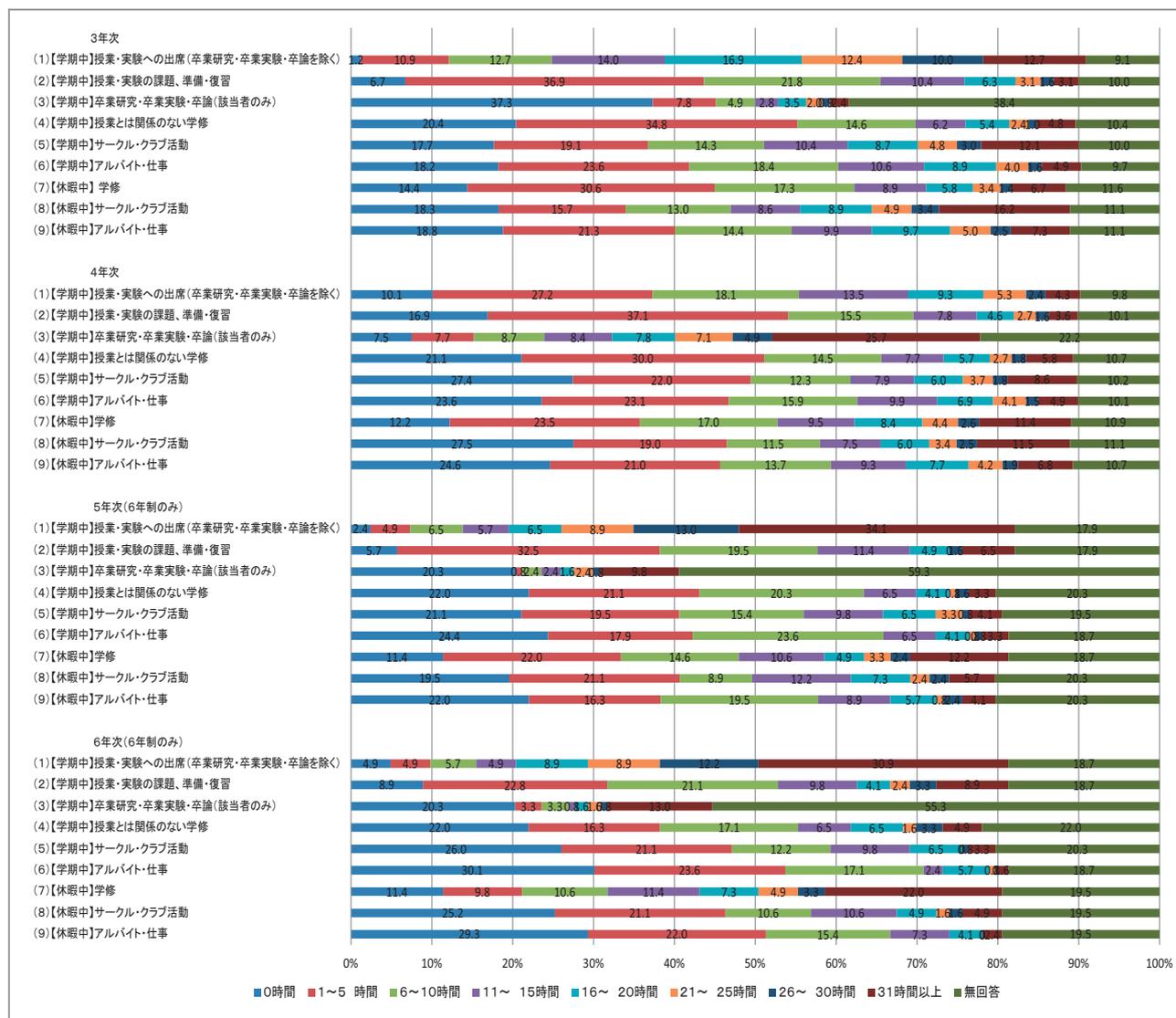
「Q21 B. 個人留学した(語学学習)」と「Q15 J. 国際経験」の満足度



左の図は、後述の「Q21 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q15 J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、国際交流経験のある者の方が満足度は高まっている。右の図は、同じように、「Q21B. 個人留学した(語学学習)」と「Q15J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。「大学のプログラム／推薦により留学した」と同様に、個人留学の国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、国際交流経験のある者の方が満足度は高い。

3年次：「授業・実験の課題、準備・復習」は「1から10時間」が約6割 4年次：「授業・実験の課題、準備・復習」は「0から5時間」が約半数、「卒業研究・卒業実験・卒論」は「31時間以上」が4分の1

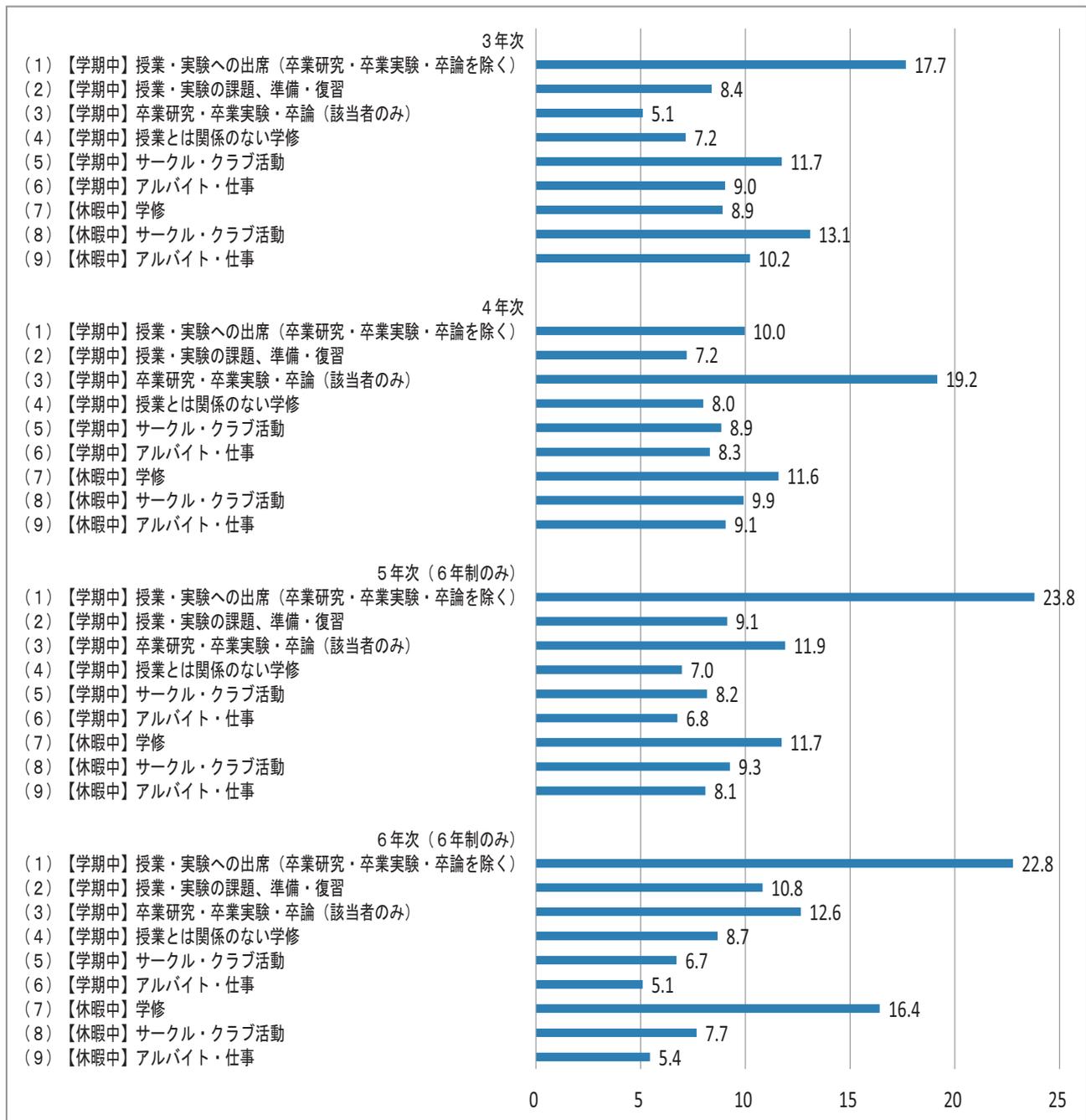
Q16 典型的な1週間（土、日を含む）の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、1週間の合計が168時間となるように、3年次と4年次について、(1)から(9)までそれぞれ1~8のどれか1つに○をつけてください。



生活時間については、昨年度までと調査方法が異なり、2012年度の「授業・授業関連の学習」を「授業・実験の課題、準備、復習」と「卒業研究・卒業実験・卒論（該当者のみ）」に分け、典型的な1週間（土日を含む）の時間数を学期中と休暇中についてそれぞれ3年次と4年次についてたずねた。3年次には「授業・実験の課題、準備・復習」は「1から10時間」が約6割（58.7%）だが、4年次では「0から5時間」が約半数（54.0%）となっている。4年次では、「卒業研究・卒業実験・卒論」は「31時間以上」が4分の1（25.7%）と最も高い割合を占めている。なお、6年制課程（医学科、獣医学課程）については、5、6年次についてのみたずねた。

3年次 : 「授業」 18 時間、「予習復習」 8 時間、「卒研卒論」 5 時間「授業外の学習」 7 時間

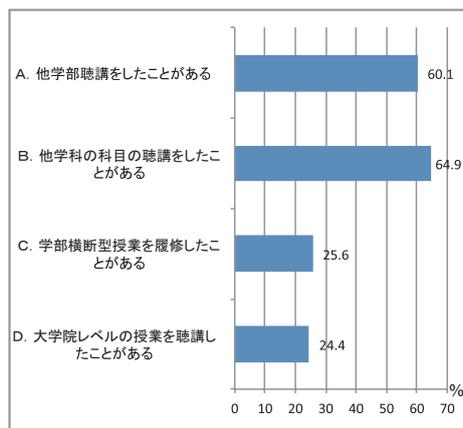
4年次 : 「授業」 10 時間、「予習復習」 7 時間、「卒研卒論」 19 時間「授業外の学習」 8 時間



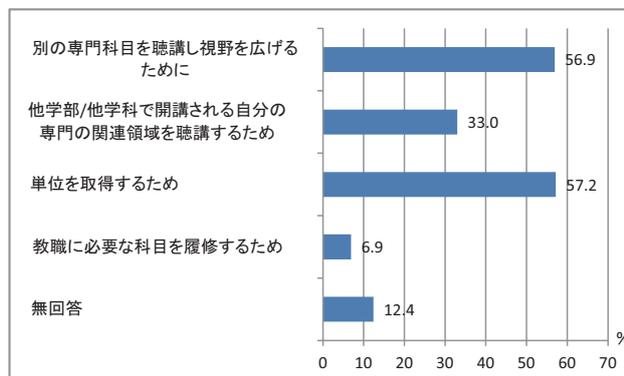
生活時間の回答のそれぞれの中位値(たとえば、「1 から 5 時間」では 3 時間)を取り、平均を算出した。なお、「31 時間以上」は 31 時間として算出した。このため、やや過小推計になっている。学期中の時間数の平均で見ると、「授業の出席 (卒業研究・卒業実験・卒論を除く)」は、3年次で 17.7 時間、4年次には 10.0 時間となっている。「授業・実験の課題、準備、復習」は、3年次で 8.4 時間、4年次には 7.2 時間となっている。「卒業研究・卒業実験・卒論 (該当者のみ)」は、3年次で 5.1 時間、4年次には 19.2 時間となっている。また、「授業とは関連のない学習」については、3年次で 7.2 時間、4年次で 8.0 時間となっている。単純に合計すると、学修時間は、3年次で、38.4 時間、4年次で 44.4 時間となっている。

「他学部聴講」の経験者は6割、「視野を広げる」ための聴講が5割以上

Q17 他学部聴講についてお聞きします。



SQ1. 他学部・他学科聴講を行った人にお聞きします。どういう意図で聴講しましたか

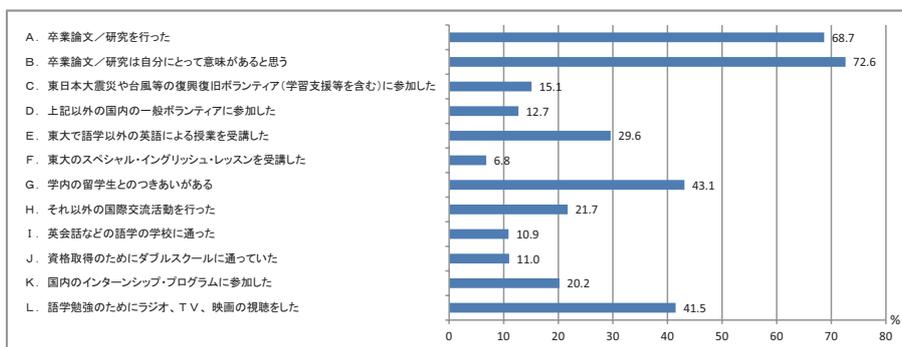


「A. 他学部聴講をしたことがある」者は、6割(60.1%)となっている。「C.学部横断型授業を履修したことがある」(25.6%)と「D.大学院レベルの授業を聴講したことがある」(24.4%)は約4分の1となっている。

「他学部・他学科聴講」の意図は、「単位を取得するため」が57.2%と最も多くなっているが、「別の専門の科目を聴講して視野を広げるため」も56.9%とほぼ等しい割合となっている。ただし、割合はわずかに減少している。

「卒業論文は意味がある」：約7割、「留学生とのつきあい」：約4割、「東日本大震災ボランティア」：1割半

Q18 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

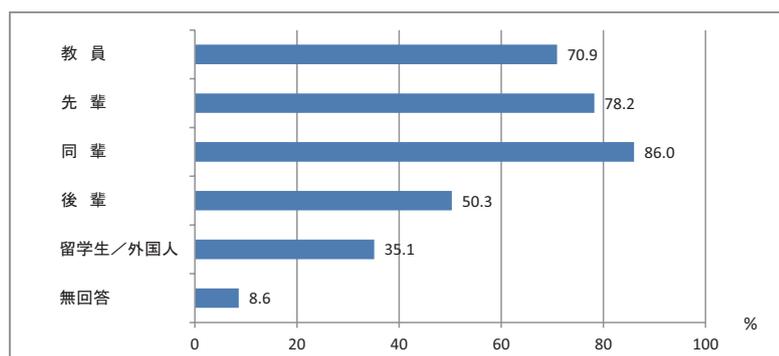


在学時の学習機会・経験として高く評価されているのは「B. 卒業論文／研究は自分にとって意味があると思う」(72.6%)と「A. 卒業論文／研究を行った」(68.7%)で7割前後になっている。また、「G. 学内の

留学生とのつきあいがある」は43.1%、「K.国内のインターンシップ・プログラムに参加した」は20.2%、「C.東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア(学習支援等を含む)に参加した」は15.1%となっている。ボランティアやインターンはやや増加する傾向にある。

「教員との学問的交流」約7割、「同輩」約8割半、「先輩」約8割、「後輩」約5割

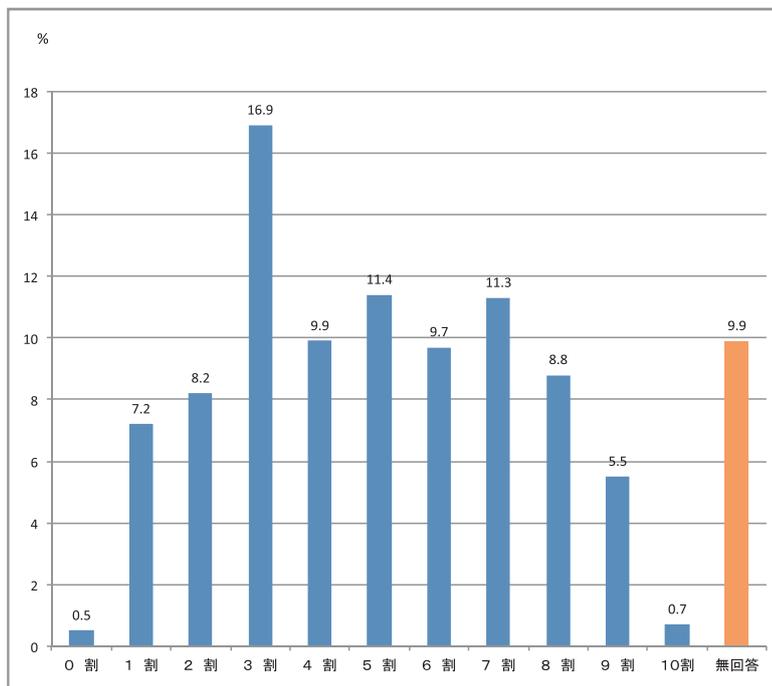
Q19 あなたは、次のような人と学問的な交流がありましたか。



最も学問的な交流があったのは、「同輩」で約8割半(86.0%)、次いで「先輩」が約8割(78.2%)、「教員」が約7割(70.9%)となっており、「後輩」は半数(50.3%)、「留学生／外国人」は約3分の1(35.1%)にとどまっている。

「優の割合」は3割が最も多く、次いで5割と7割

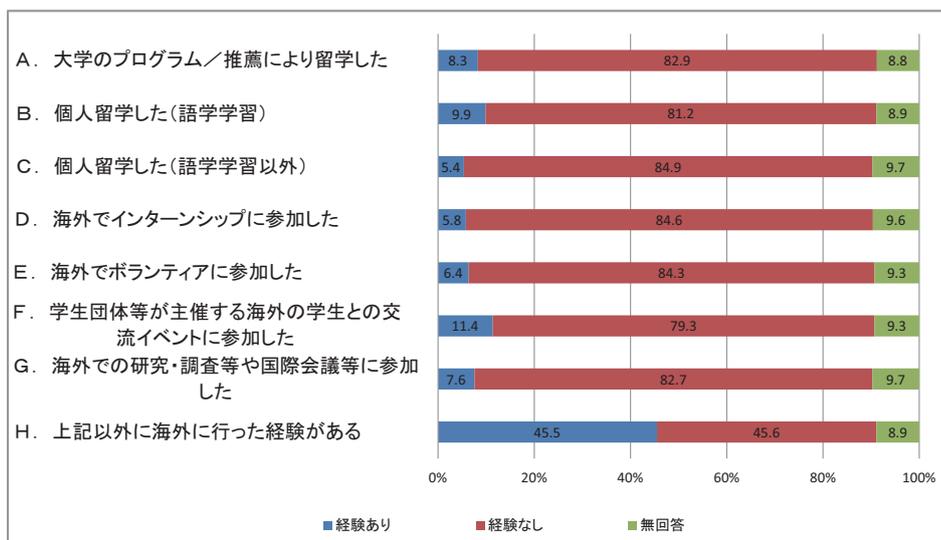
Q20 あなたの成績についてお聞きします。「優」(A)は何割くらいありましたか。数値を()に記入してください。「優上」や「秀」などの優以上を含めた割合をお答えください。



成績の自己評価について、優の割合で見ると、「3割」が16.9%と最も多く、次いで「5割」が11.4%、「7割」が11.3%となっており、対称ではなく、右に歪んだ分布になっている。「4割」と「6割」もそれぞれ9.9%と9.7%とやや高い割合を占め、平均では、4.8割となっている。

「国際交流経験」では、「大学のプログラム／推薦により留学」は8.3%で大幅増加、「個人留学（語学学習）」が9.9%と増加

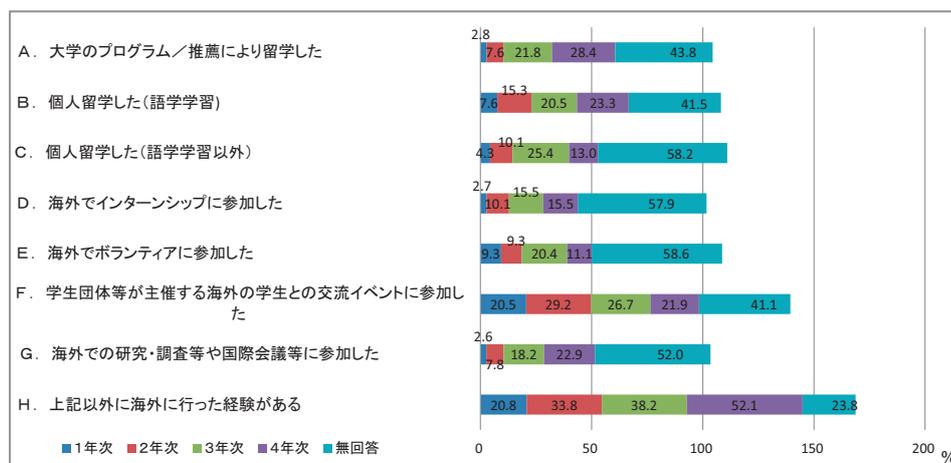
Q21 在学時の国際交流経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。



「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」者は8.3% (2012年度4.7%, 以下同じ)で2012年度から大幅に増加している。「B. 個人留学した(語学学習)」は9.9% (8.5%)、「C. 個人留学した(語学学習以外)」は5.4% (3.6%)、「D. 海外でインターンシップに参加した」は5.8%

(3.8%)、「E. 海外でボランティアに参加した」は6.4% (3.5%)といずれも2012年度より増加している。「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は7.6% (5.0%)、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、11.4% (9.8%)となっており、絶対的な割合はまだ低いものの増加傾向にある。「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は45.5% (43.3%)と4割以上になっている。

「国際交流経験」の時期は、1年次は少なく、学年が上がるにつれて高まる傾向



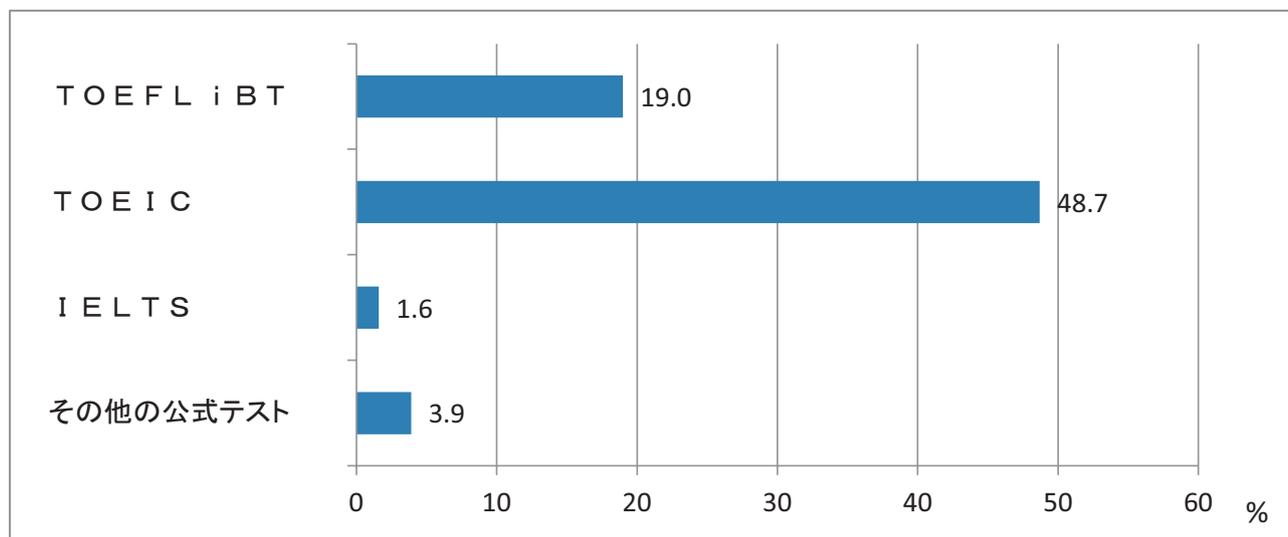
前問(Q21)の国際交流経験について、経験者に何年次に経験をしたかをたずねた。複数回答のため、合計は100%を超えている。「無回答」が多いため、注意が必要だが、国際活動の時期は、1年次は少なく、学年が上がる

に従って割合が高くなる傾向が見られる。しかし、項目によっては3年次が最も高い割合となっている。ただし、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」については、あまり学年による差はない。

なお、5, 6年次についてはたずねていない。

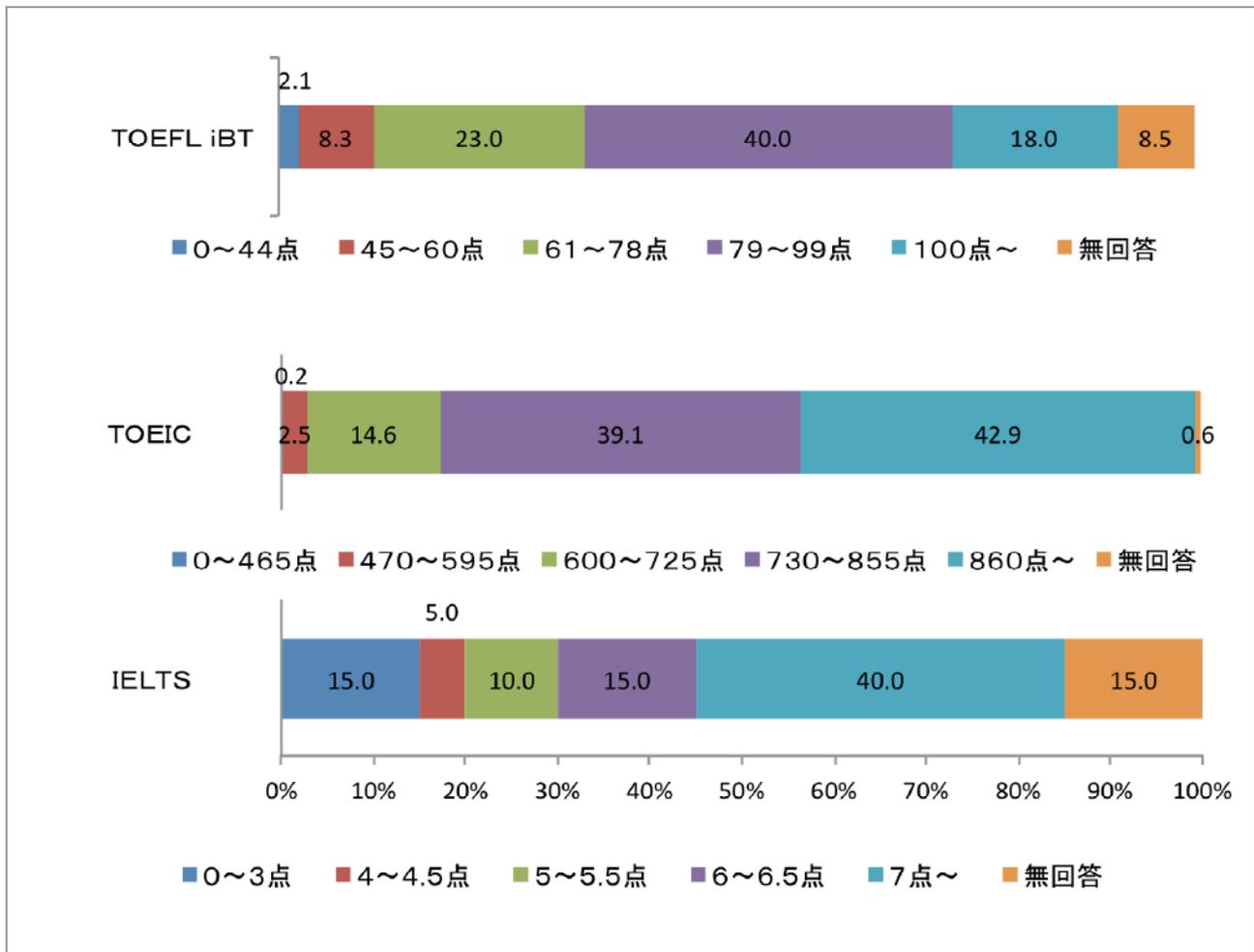
「TOEFL iBT 受験者」は約2割、「TOEIC 受験者」は半数近い

Q22 あなたは、在学中に TOEFL や TOEIC 等の公式テストを受験したことがありますか。



TOEFL iBT の受験者は 19.0% (2012 年度 16.6%, 以下同じ)、TOEIC 受験者は 48.7% (48.6%)、IELTS 受験者は 1.6% (2.0%)、その他の試験は 3.9% (4.1%) となっている。設問が異なるため、2011 年度までと比較はできないが、TOEIC のみ比較可能で、2011 年度は 51.2% で、やや減少傾向にある。

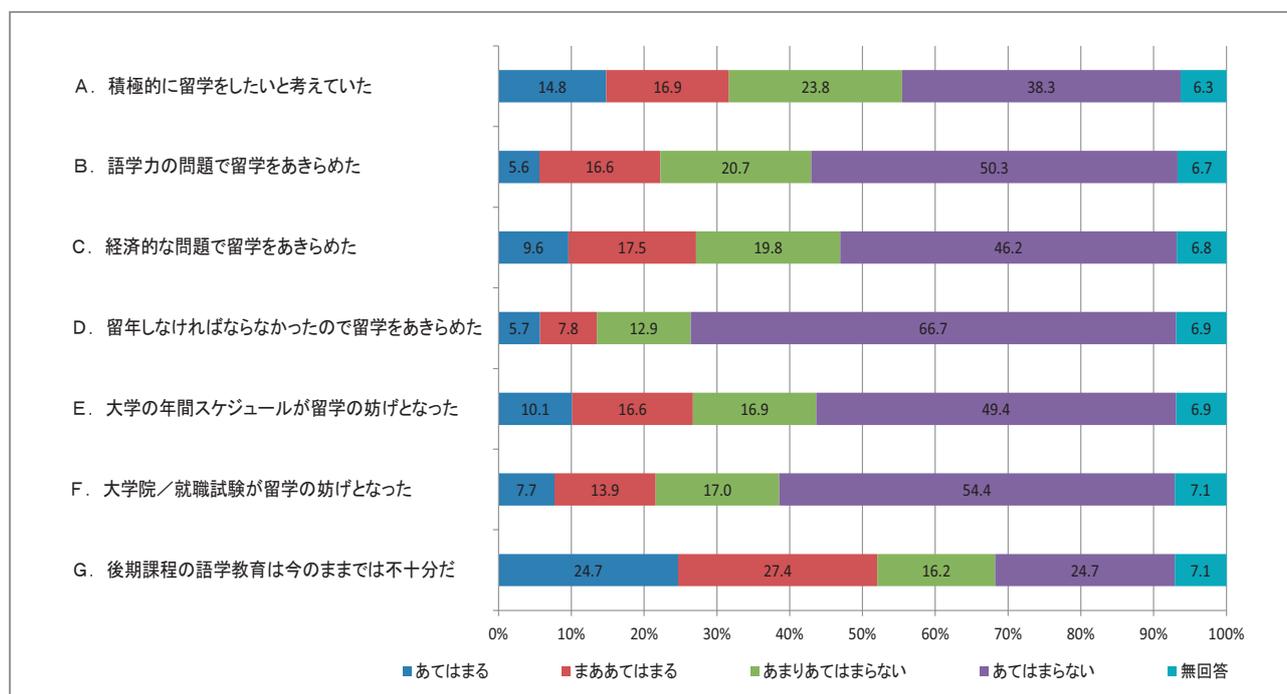
TOEFL iBT は「79 から 99 点」、TOEIC は、「860 点以上」、IELTS は「7 点以上」が最も高い割合



それぞれの得点の分布は、満点が異なるため、割合で示すと、TOEFL iBT は「79 ～ 99 点」、TOEIC は、「860 点以上」、IELTS は「7 点以上」が最も高い割合となっている。なお、2012 年度では、TOEIC は「730 ～ 855 点」、IELTS は「6 ～ 6.5 点」が最も高い割合であった。

「留学の障害」は「経済的な問題」、「大学の年間スケジュール」、「語学力」、「大学院／就職試験」の順で、いずれも減少

Q23 留学や語学学習についてお聞きします。

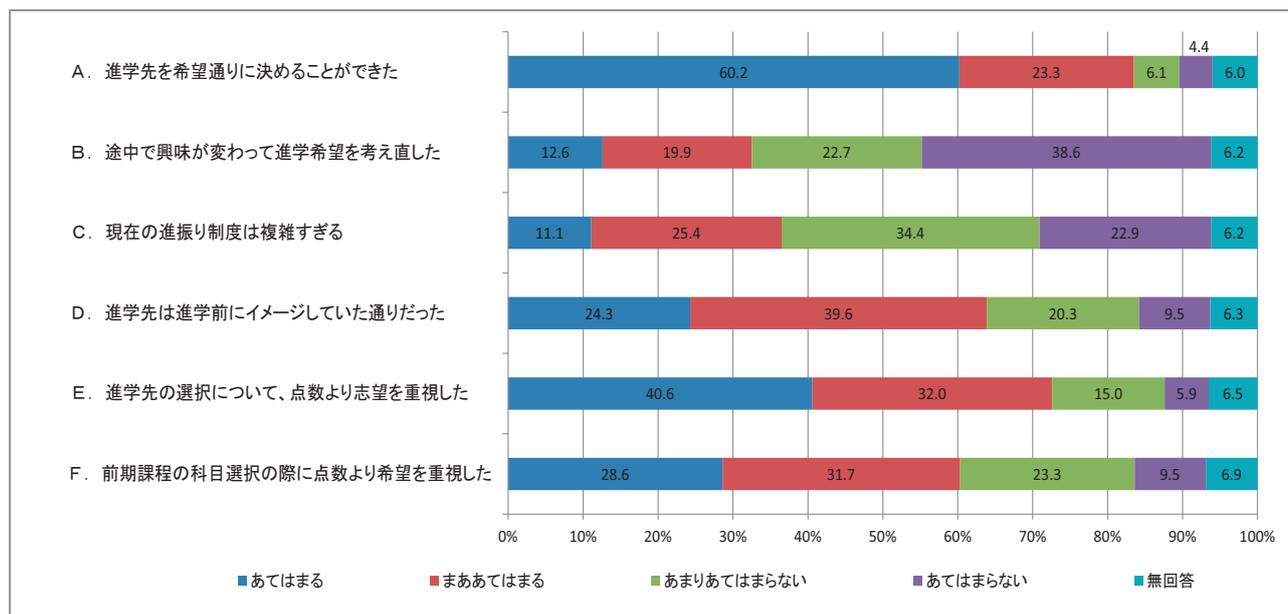


「B. 語学力の問題で留学をあきらめた」者は、約2割（「あてはまる」5.6%と「まああてはまる」16.6%を合わせて22.2%、以下同じ）であるが、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」者は、約3割（27.1%）である。また「E. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」者は26.7%で2012年度の34.8%より大幅に減少している。「F. 大学院／就職試験が留学の妨げとなった」も同様に21.6%と2012年度の28.5%より減少している。さらに、「G. 後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者は、52.1%で、2011年度の64.4%、2012年度の56.5%より減少する傾向にある。これに対して、「積極的に留学したいと考えていた」者は、多少増減があるものの2013年度には「あてはまる」14.8%、「まああてはまる」16.9%で合わせて31.7%と2010年度の35.6%からやや減少傾向にある。

本年度初めて調査した「D. 留年しなければならなかったので留学をあきらめた」は「あてはまる」5.7%と「まああてはまる」7.8%を合わせて13.5%となっている。

「進学先」は「希望通り」：8割以上、「進学希望を考え直した」：約3分の1

Q24 進学振分けについてお聞きします。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。



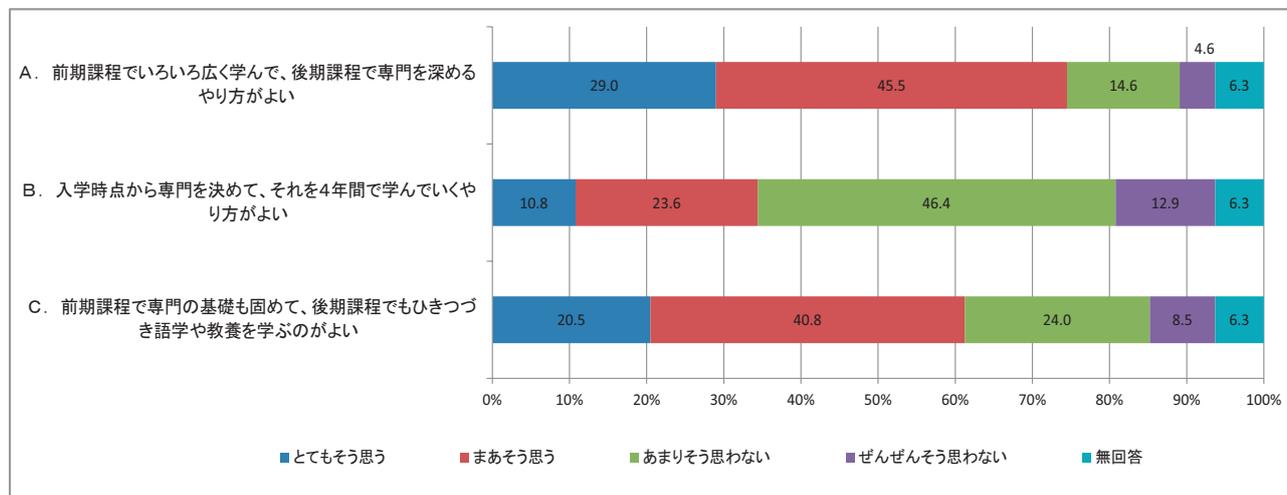
「A. 進学先を希望通りに決めることができた」者は、83.5%（「あてはまる」60.2%と「まああてはまる」23.3%を合わせて、以下同じ）8割をこえている。ただし、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者も約3分の1（32.5%）となっている。さらに、「D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、63.9%で、2012年度の70.0%よりかなり減少している。「C. 現在の進振り制度は複雑すぎる」は36.5%で約3分の1の者が複雑すぎるとしている。「E. 進学先の選択について、点数より志望を重視した」は、約7割（72.6%）となっている。「F. 前期課程の科目選択の際に点数より希望を重視した」は6割（60.3%）である。

「A. 進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は87.6%で2013年度には83.5%とやや減少傾向にある。また、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2008年度には36.6%で、2013年度は32.5%となっている。さらに、「D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は2008年度の68.4%から2013年度には63.9%と減少し、「F. 前期課程の科目選択の際に点数より希望を重視した」は2012年度は64.0%で、2013年度は60.3%と、いずれの項目も減少傾向にある。

「G. 全科類枠で進学した」で進学した者の割合は、7.4%となっている（グラフ省略）。

「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」現行方式を評価する者が約4分の3だが、「後期課程でも語学や教養を学ぶのがよい」という者も約6割

Q25 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。

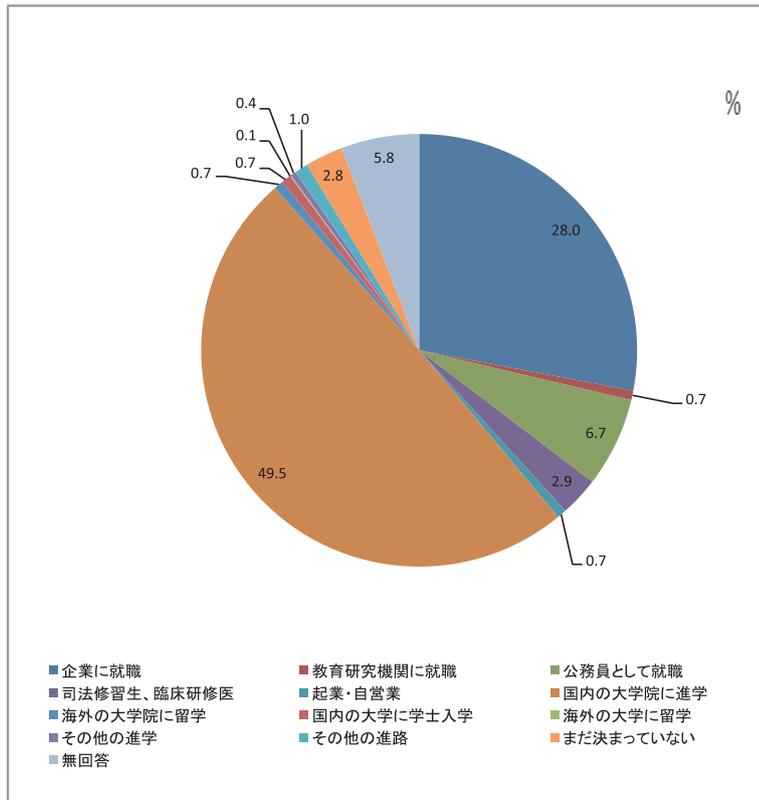


「専門と教養の学習の仕方について」では、「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行方式を支持する者が、「とてもそう思う」29.0%と「まあそう思う」45.5%を合わせて4分の3（74.5%）で、これに対して、逆に、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という方式を支持する者は約3分の1（34.4%）となっている。また、両者の中間の方式として「C. 前期課程で専門の基礎も固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学ぶのがよい」とする者も61.3%と約6割となっている。

「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」36.0%、「まあそう思う」43.9%で合わせて79.9%であったが、2013年度には合わせて74.5%とやや減少傾向にある。これに対して、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」8.5%、「まあそう思う」23.1%で合わせて31.6%であったが、2013年度には合わせて34.4%とやや増加傾向にある。

「卒業後の予定」：「進学」が半数以上、「就職」が約4割

Q26 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。



働く

1. 企業に就職 (28.0%)
2. 教育研究機関に就職 (0.7%)
3. 公務員として就職 (6.7%)
4. 司法修習生、臨床研修医 (2.9%)
5. 起業・自営業 (0.7%)

学ぶ

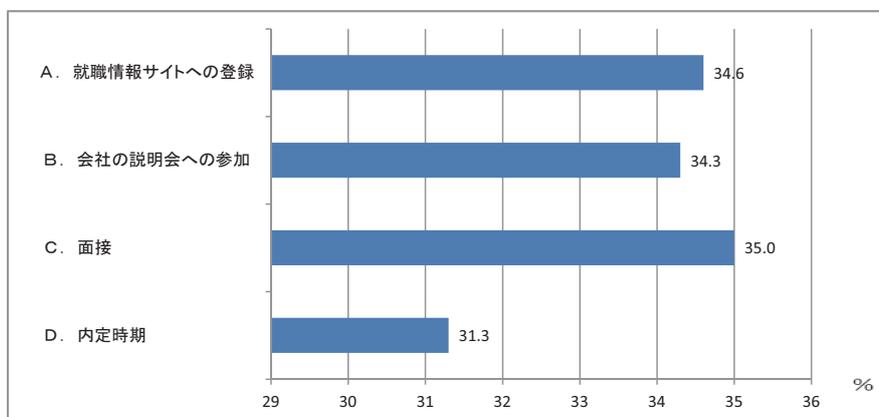
6. 国内の大学院に進学 (49.5%)
7. 海外の大学院に留学 (0.7%)
8. 国内の大学に学士入学 (0.7%)
9. 海外の大学に留学 (0.1%)
10. その他の進学 (0.4%)
11. その他の進路 (1.0%)

未定

12. まだ決まっていない (2.8%)

4月からの予定としては、「国内の大学院に進学」が49.5%と最も多く、「海外の大学院に留学」(0.7%)と合わせて、大学院進学予定は、5割(50.2%)となっている。さらに、「国内の大学に学士入学」(0.7%)と「海外の大学に留学」(0.1%)と「その他の進学」(0.4%)を合わせて進学は51.4%と半数をこえている。これに対して、「企業に就職」は約3割(28.0%)で、「教育研究機関に就職」(0.7%)、「公務員として就職」(6.7%)、「司法修習生、臨床研修医」(2.9%)、「起業・自営業」(0.7%)と合わせて就職予定は、約4割(39.0%)となっている。進路未定は2.8%ときわめて少ない。

Q27 民間企業への就職活動を行った人のみお答えください。あなたはつぎのような就職活動を経験しましたか。経験した場合には()に時期を記入してください。



民間企業への就職活動としては「C. 面接」が35.0%と最も高い割合を示しており、以下、「A. 就職情報サイトへの登録」(34.6%)と「B. 会社の説明会への参加」(34.3%)がほぼ等しくなっている。また、「D. 内定時期」に関しては、31.3%が「内定」を受けている。なお、進路が就職者のみの場合には93.8%が「内定」を受けている。

「民間企業への就職活動の時期」は3年生後期に集中

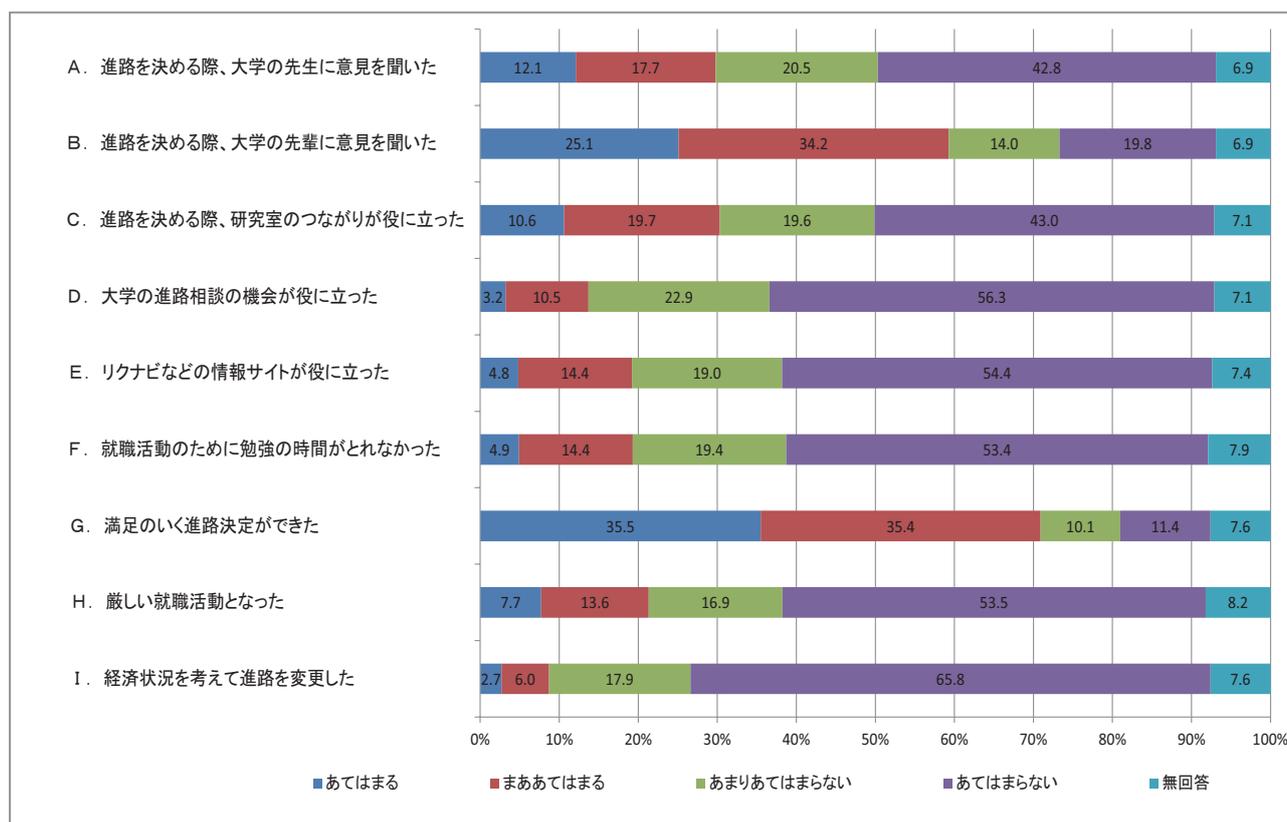
民間企業への就職活動の時期については、下表のように、3年生後期に集中しており、次いで3年生前期となっている。ただし、内定は4年生前期が69.4%と最も高い割合を占めている。

合計	1年生	2年生	3年生 前期 (4-9月)	3年生 後期 (10-翌3月)	4年生 前期 (4-9月)	4年生 後期 (10-翌3月)	5年生 前期 (4-9月)	5年生 後期 (10-翌3月)	6年生 前期 (4-9月)	6年生 後期 (10-翌3月)	年or月 不明	無回答
A. 就職情報サイトへの登録	0.1	0.8	24.9	61.3	2.8	4.8	0.2	0.6	0.2	0.1	1.0	3.1
B. 会社の説明会への参加	-	0.8	10.7	73.9	3.1	6.3	0.2	0.6	0.1	0.1	0.8	3.3
C. 面接	-	-	10.3	38.9	38.0	6.7	0.5	0.5	1.0	0.2	0.7	3.4
D. 内定時期	-	-	5.0	13.6	69.4	5.2	2.0	0.3	0.9	0.9	0.4	2.4

%

「進路決定」：「大学の先輩の意見」が約6割、7割の者が「満足のいく進路決定ができた」が「厳しい就職活動になった」も就職者の約4割

Q28 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。



進路を決める際に、最も意見を聞いた者の割合が高いのは、「B. 先輩」（「あてはまる」25.1%と「まああてはまる」34.2%を合わせて59.3%、以下同じ）と6割近い。「A. 進路を決める際、大学の先生に意見を聞いた」（29.8%）と「C. 進路を決める際、研究室のつながりが役に立った」（30.3%）のは約3割で、「G. 満足のいく進路決定ができた」（70.9%）のは7割となっている。他方、「H. 厳しい就職活動となった」者も21.3%と2割をこえている。「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」（19.9%）と「H. 厳しい就職活動となった」（21.3%）は、4月からの予定（Q26）を「働く」とした者に限ると、それぞれ37.4%と39.1%と4割近くになる（グラフは省略）。

6回の調査で変化が見られる項目

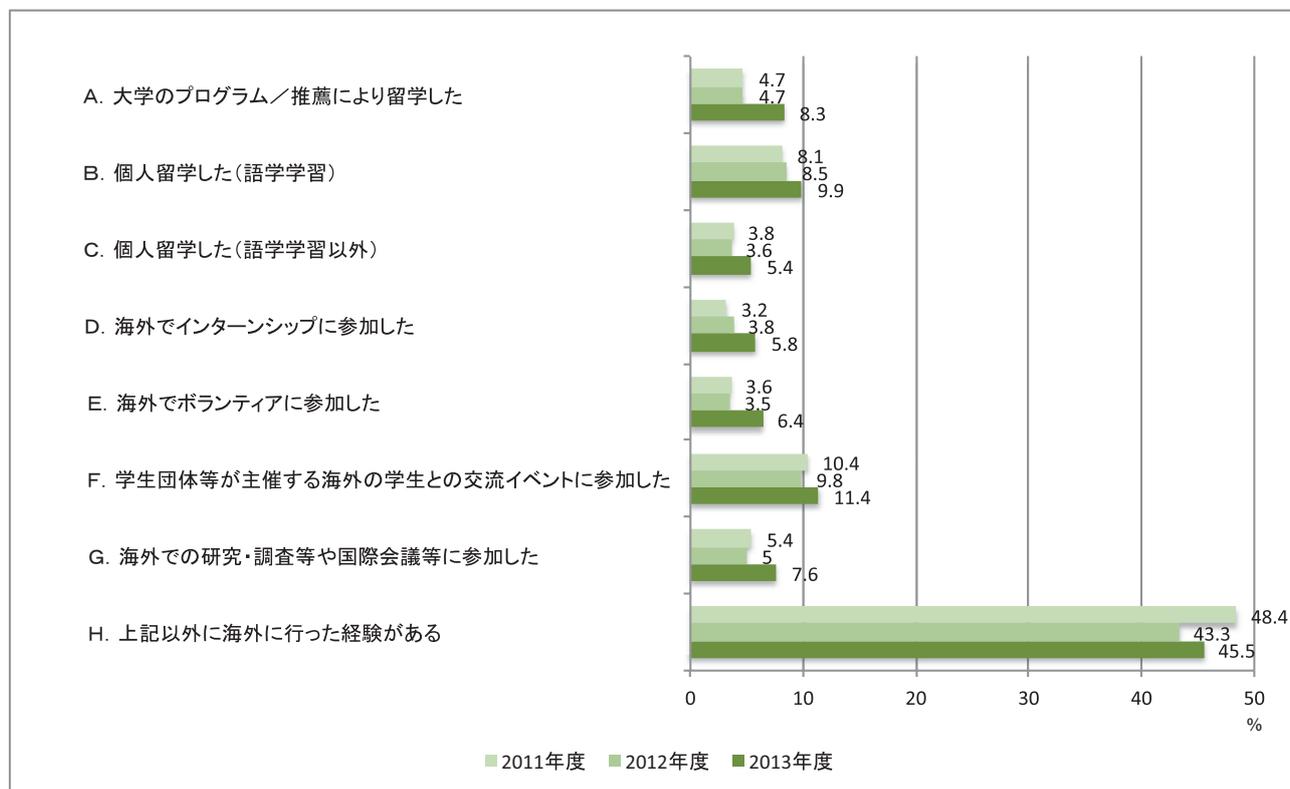
達成度調査は2008年度（2009年3月実施）の第1回から、2013年度（2014年3月実施）で、6回を数える。第1回の回収率は39.7%であったが、年度ごとに回収率は増加し、第6回には81.0%となっている。

この6回の調査項目を時系列的に見ると、多くの項目でそれほど大きな変化はみられない。もともと、身につけた能力の自己評価や満足度や意識などは比較的变化しにくい特性を持っている。しかし、それほど大きな差ではないが、この間に増加あるいは減少している質問項目も見られる。ここでは、それらの項目について、経年変化を見ることにする。

「国際活動」や「国際経験」は増加し、「満足度」や「外国語でコミュニケーションする能力」も高くなっている

「大学のプログラム／推薦による留学や個人留学」は2013年度に大幅に増加

Q21 在学時の国際交流経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。

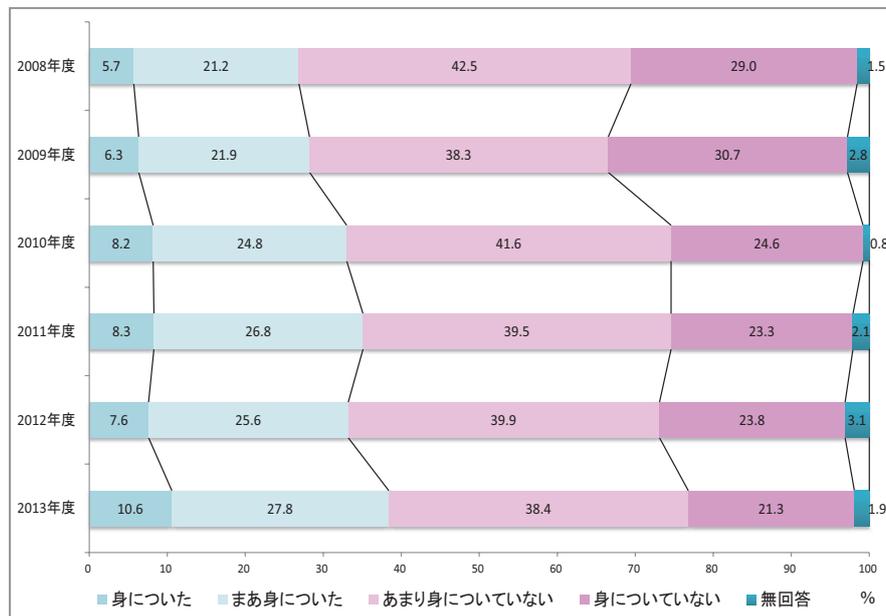


「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」者は8.3%（2012年度4.7%，以下同じ）で2012年度から大幅に増加している。「B. 個人留学した（語学学習）」は9.9%（8.5%）、「C. 個人留学した（語学学習以外）」は5.4%（3.6%）、「D. 海外でのインターンシップに参加した」は5.8%（3.8%）、「E. 海外でボランティアに参加した」は6.4%（3.5%）といずれも2012年度より増加している。「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は7.6%（5.0%）、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、11.4%（9.8%）となっており、絶対的な割合はまだ低いものの増加傾向にある。「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は45.5%（43.3%）と4割以上になっている。

「外国語でコミュニケーションする能力」は増加傾向

Q 10. あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

外国語でコミュニケーションする能力

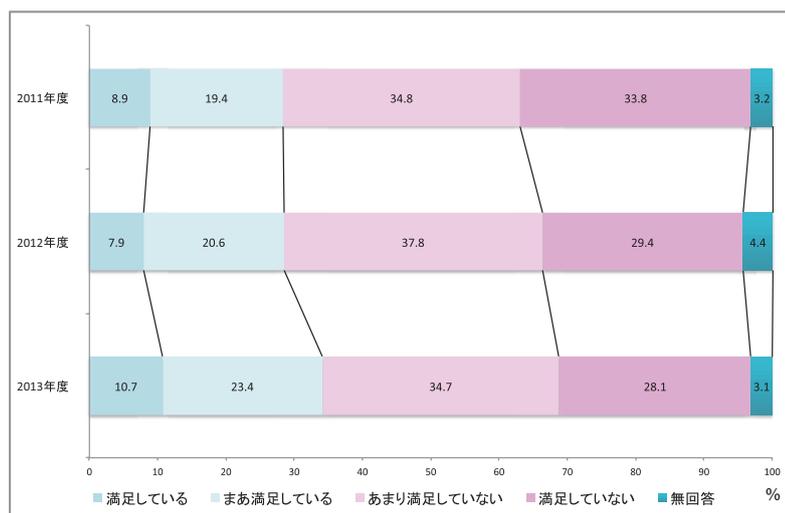


身につけた能力の自己評価で、この6年間に最も変化しているのは、「外国語でコミュニケーションする能力」で、2008年度には「身についた」5.7%、「まあ身についた」21.2%と合わせて26.9%であったが、年度ごとにやや増減はあるが、増加傾向にあり、2013年度には、「身についた」10.6%、「まあ身についた」27.8%と合わせて38.4%と増加している。

「国際経験」の満足度は増加傾向

Q15 あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きます。

国際経験



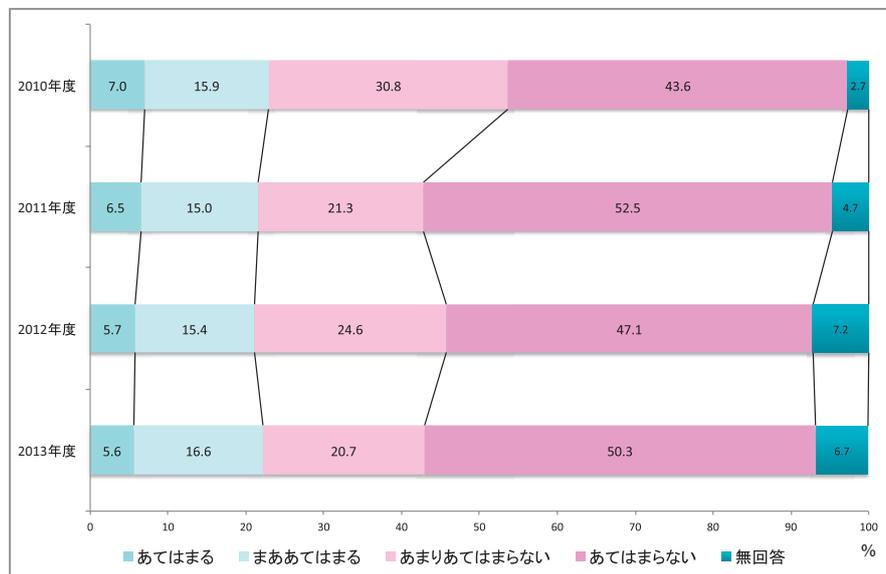
国際経験の満足度については、2011年度からたずねているが、2011年度は「満足している」8.9%と「まあ満足している」19.4%と合わせて28.3%であったが、2013年度は、それぞれ10.7%と23.4%で合わせて34.1%とわずかではあるが、増加傾向にある。

「留学障害」は大幅に減少

「語学力の問題で留学をあきらめた」者は減少傾向

Q23 留学や語学学習についてお聞きします。

語学力の問題で留学をあきらめた



「語学力の問題で留学をあきらめた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」7.0%、「まああてはまる」15.9%で合わせて22.9%であったが、2013年度には「あてはまる」5.6%、「まああてはまる」16.6%で合わせて22.2%とやや減少傾向にある。とくに「あてはまる」のみは2010年度の7.0%から一貫して減少しており、2013年度には5.6%となっている。

「経済的な問題で留学をあきらめた」者も減少傾向

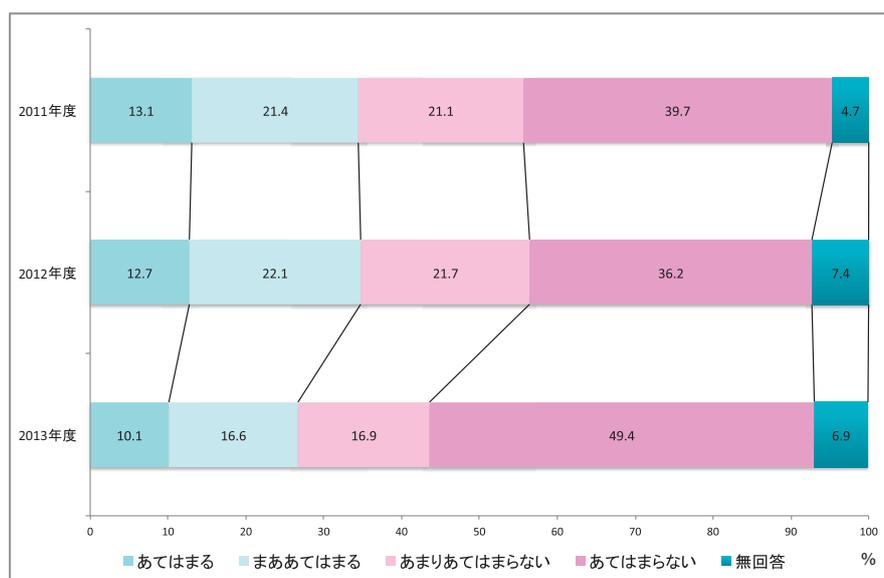
経済的な問題で留学をあきらめた



「経済的な問題で留学をあきらめた」者の割合も、最初に調査された2010年度は「あてはまる」11.9%、「まああてはまる」19.5%で合わせて31.4%であったが、一貫して減少しており、2013年度には「あてはまる」9.6%、「まああてはまる」17.5%で合わせて27.1%と減少傾向にある。

「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者も減少傾向

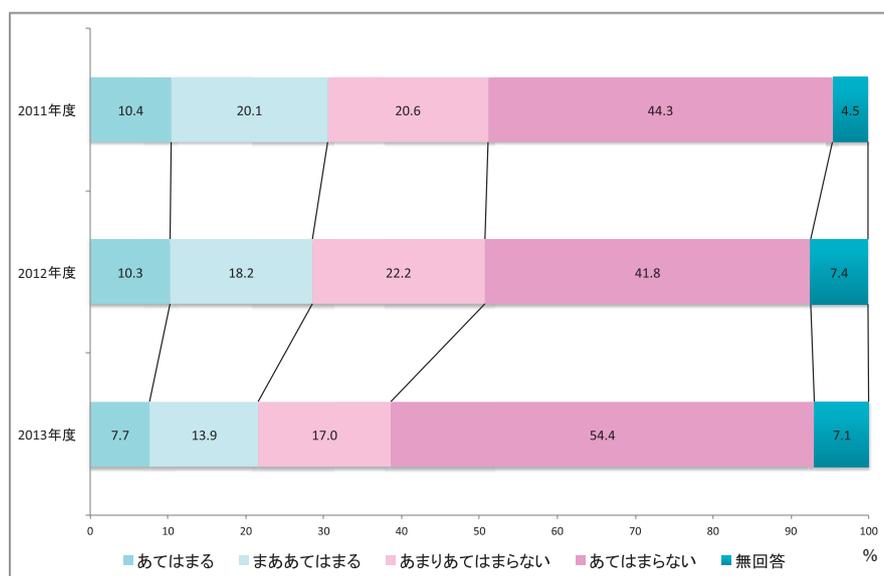
大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった



「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者の割合は、最初に調査された2011年度は「あてはまる」13.1%、「まああてはまる」21.4%で合わせて34.5%であったが、多少増減があるものの2013年度には「あてはまる」10.1%、「まああてはまる」16.6%で合わせて26.7%と減少している。

「大学院／就職試験が留学の妨げとなった」者は大幅に減少

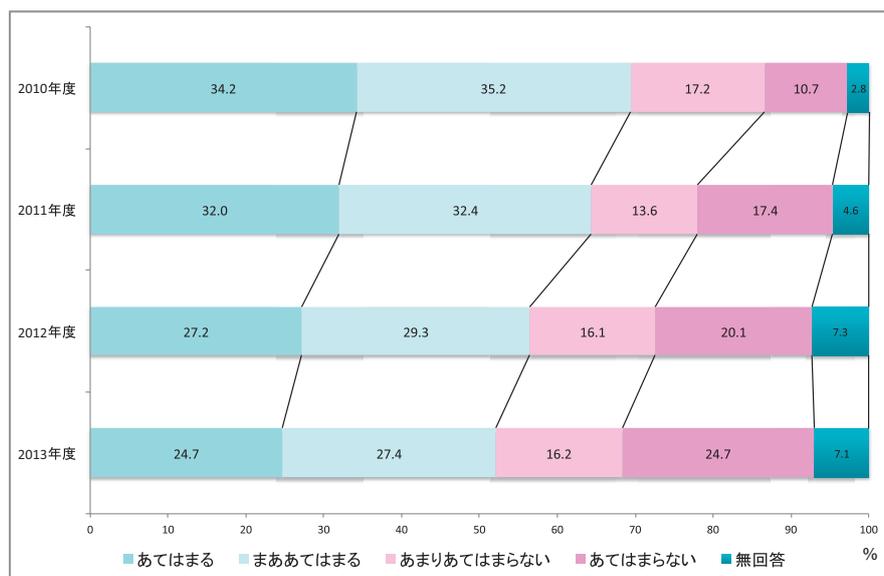
大学院／就職試験が留学の妨げとなった



「大学院／就職試験が留学の妨げとなった」者の割合も、最初に調査された2011年度は「あてはまる」10.4%、「まああてはまる」20.1%で合わせて30.5%であったが、一貫して減少しており、2013年度には「あてはまる」7.7%、「まああてはまる」13.9%で合わせて21.6%と大幅に減少している。

「後期課程の語学教育は不十分」とする者も減少傾向

後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ



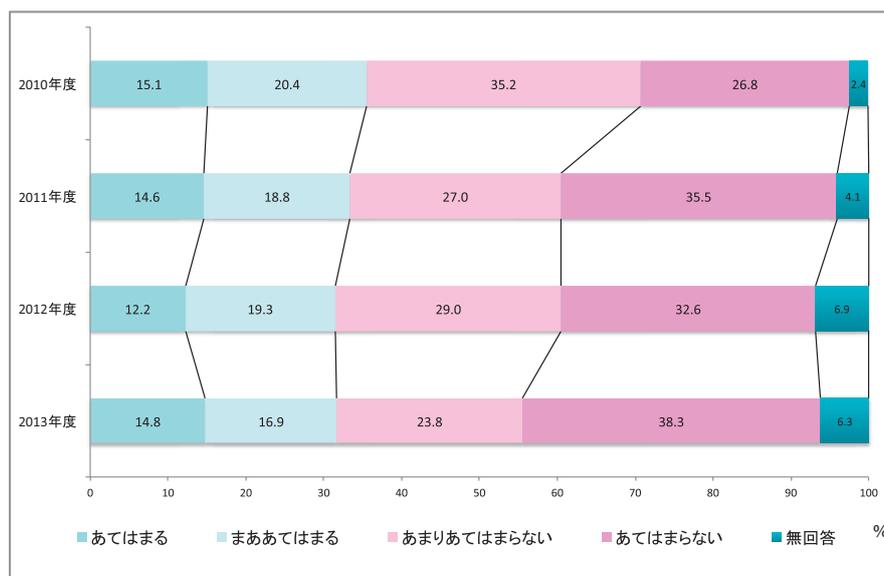
「後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者の割合も、最初に調査された2010年度は「あてはまる」34.2%、「まああてはまる」35.2%で合わせて69.4%であったが、一貫して減少しており、2013年度には「あてはまる」24.7%、「まああてはまる」27.4%で合わせて52.1%と大幅に減少している。

「留学」や「語学」に関して否定的な傾向もある

「積極的に留学したい」者はわずかに減少傾向

Q23 留学や語学学習についてお聞きします。

積極的に留学をしたいと考えていた

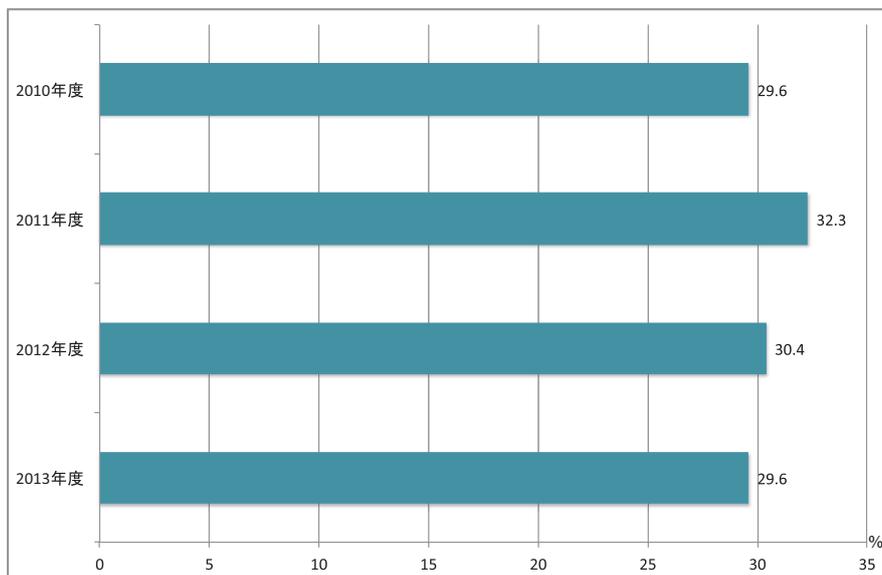


留学や語学学習について「積極的に留学をしたいと考えていた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」15.1%、「まああてはまる」20.4%で合わせて35.5%であったが、多少増減があるものの2013年度には「あてはまる」14.8%、「まああてはまる」16.9%で合わせて31.7%とやや減少傾向にある。

「東大で語学以外の英語による授業を受講した」者はわずかに減少傾向

Q 18 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

東大で語学以外の英語による授業を受講



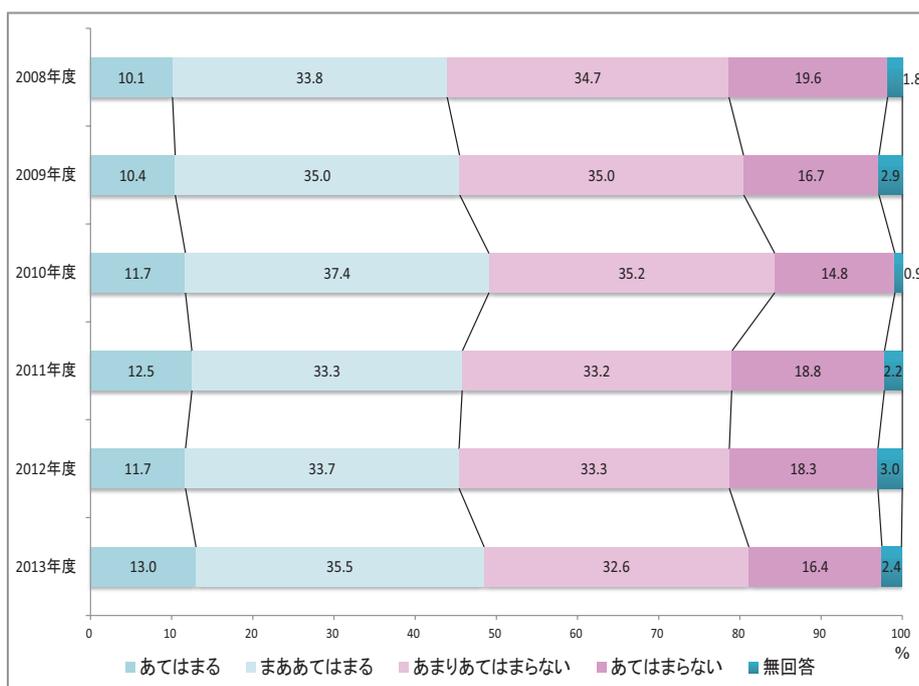
「東大で語学以外の英語による授業を受講した」者の割合は、2010年度29.6%で、2011年度32.3%と増加したが、2012年度30.4%、2013年度29.6%とわずかに減少傾向にある。

その他の肯定的な傾向

「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」は年々わずかに増加

Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。

TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた

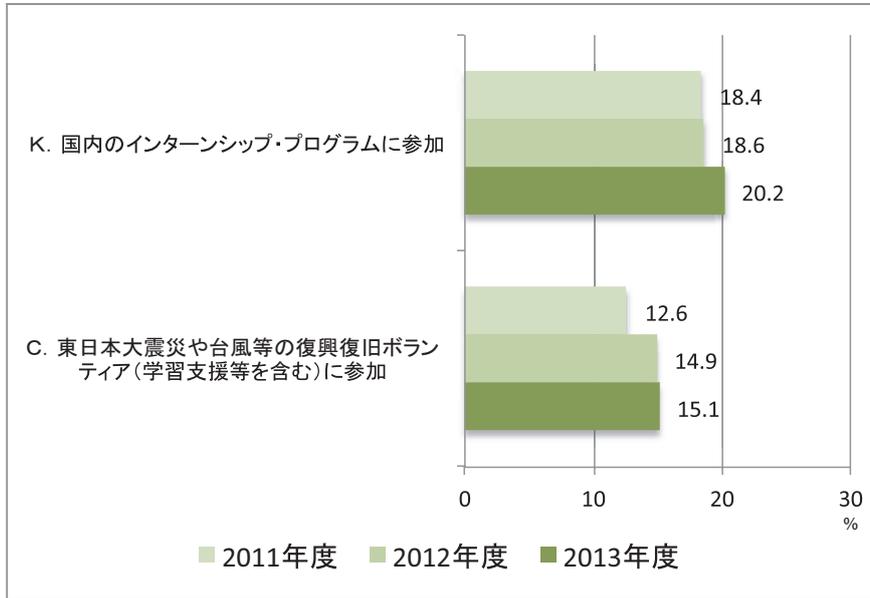


「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」は、2008年度は「あてはまる」10.1%と「まああてはまる」33.8%を合わせて43.9%であったが、2013年度には48.5%と年々わずかに評価する者の割合が増加する傾向にある。

「ボランティア」や「インターンシップ」に参加した者の割合は増加傾向

Q18 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等を含む）に参加した
国内のインターンシップ・プログラムに参加した



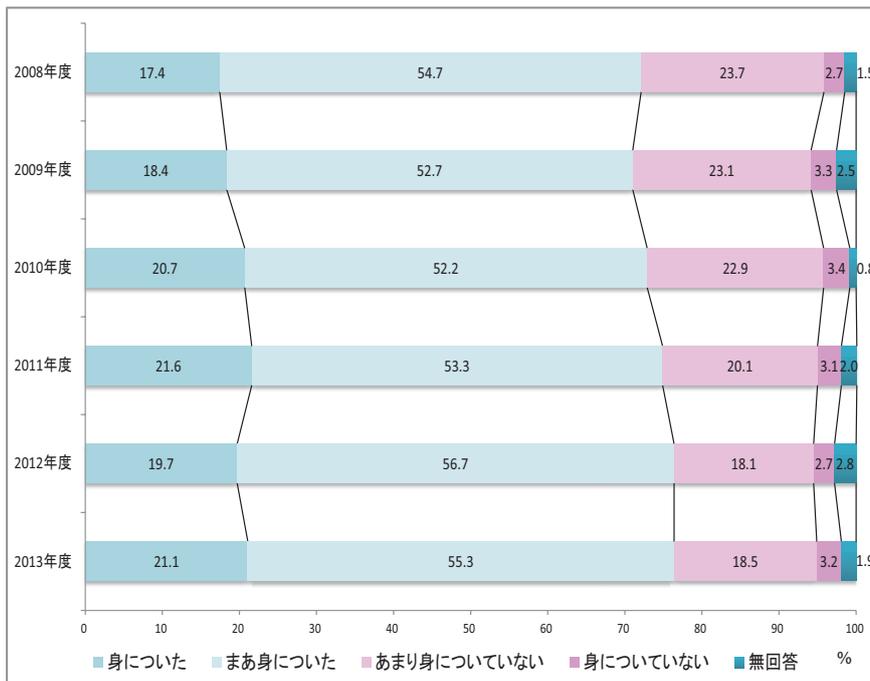
「国内のインターンシップ・プログラムに参加」した者の割合は、2011年度18.4%、2012年度18.6%、2013年度20.2%と着実に増加している。

「東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等も含む）に参加」した者の割合も2011年度12.6%、2012年度14.9%、2013年度15.1%と着実に増加している。

「論理的な文章をまとめる能力」は増加

Q 10 あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

論理的な文章をまとめる能力



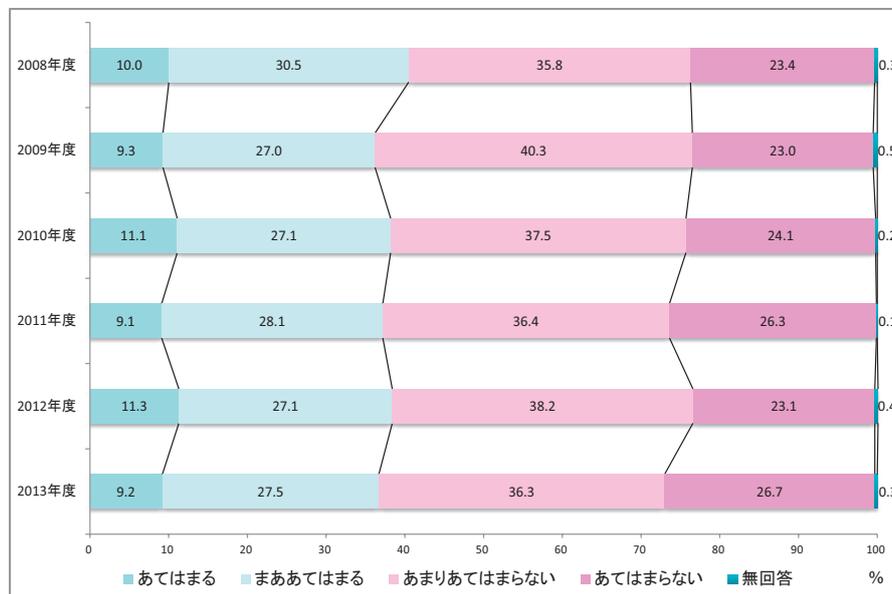
「論理的な文章をまとめる能力」も、2008年度には「身についた」17.4%、「まあ身についた」54.7%と合わせて72.1%であったが、年度ごとに増加し2011年度には「身についた」21.6%、「まあ身についた」53.3%と合わせて74.9%となった。しかし、2013年度には、「身についた」21.1%と「まあ身についた」55.3%と合わせると76.4%とやや増加している。

評価や経験した割合が下がっているものもある

「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者はわずかに減少

Q 8 入学時の様子についてお聞きします。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。

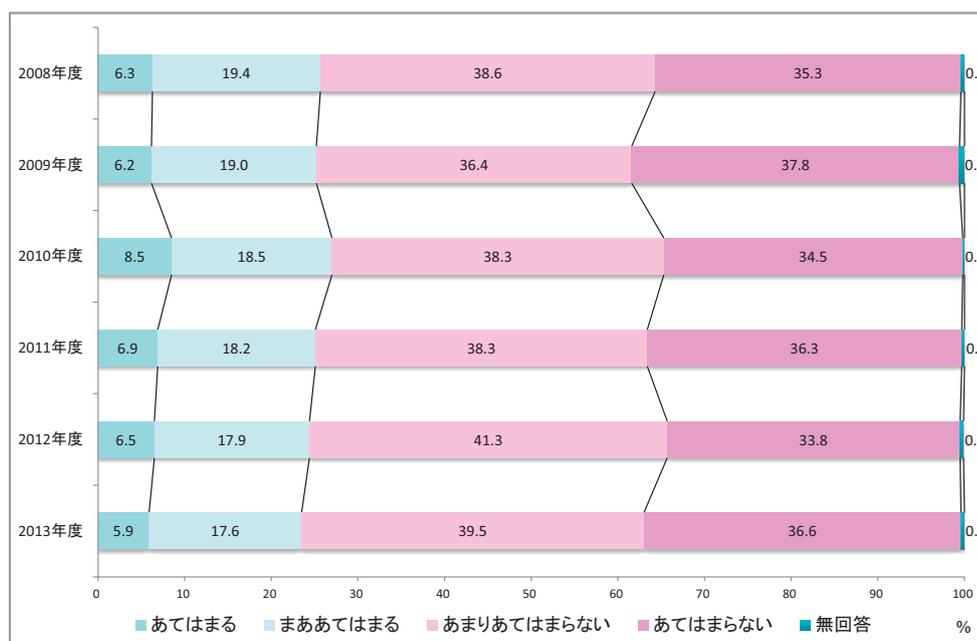
大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた



入学時の様子について、「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は、年度ごとに増減があるが、2008年度「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」30.5%で合わせて40.5%に対して、2013年度は「あてはまる」9.2%、「まああてはまる」27.5%で合わせて36.7%と年々わずかではあるものの、減少傾向にある。

「入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者の割合はわずかに減少傾向

入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた

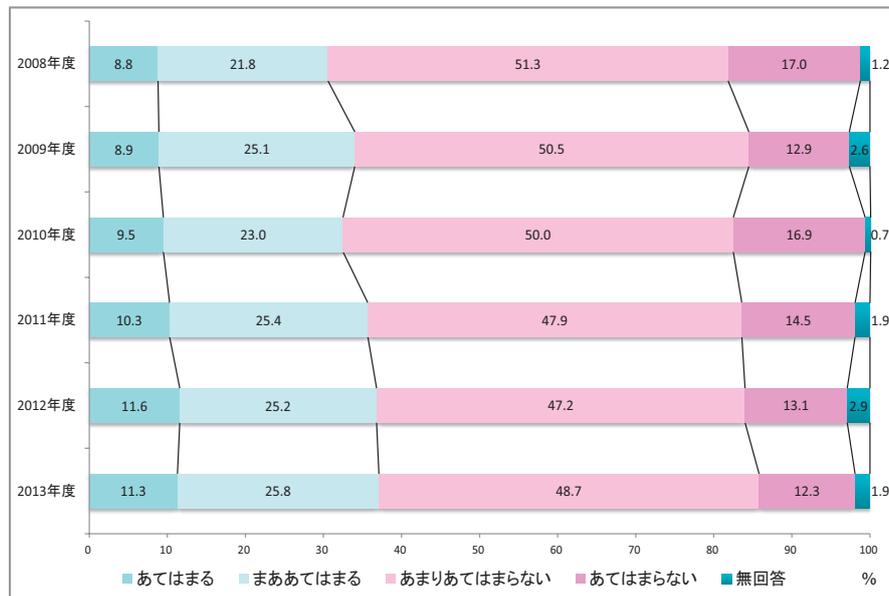


「入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者の割合は、2008年度「あてはまる」6.3%、「まああてはまる」19.4%で合わせて25.7%に対して、2013年度は「あてはまる」5.9%、「まああてはまる」17.6%で合わせて23.5%と年度ごとに増減があるが、年々わずかではあるものの、減少傾向にある。

「必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかつた」は増加傾向

Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。

必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかつた

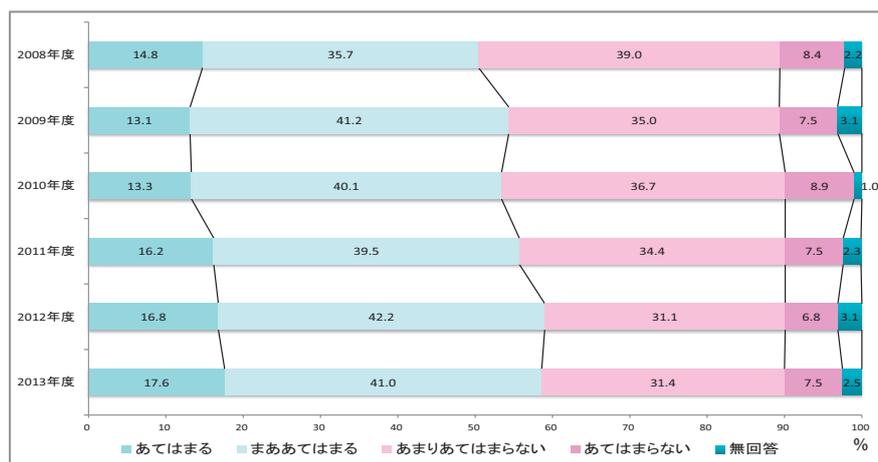


「必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかつた」は、2008年度は「あてはまる」8.8%と「まああてはまる」21.8%を合わせて30.6%であったが、2013年度には37.1%と年々増加傾向にある。

「専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」者は増加傾向

Q14 あなたは、大学時代につきのような経験がありましたか

専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた

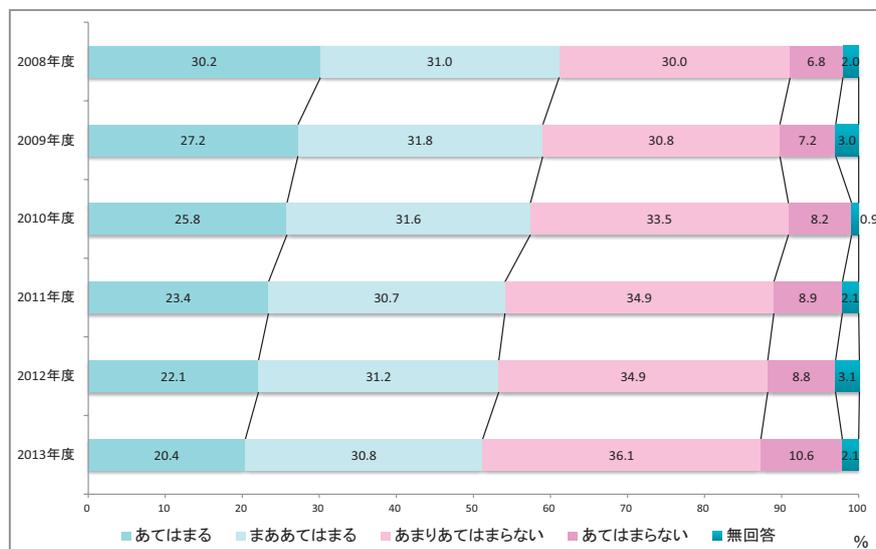


「専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」と否定的な評価をする者は、2008年度は「あてはまる」14.8%と「まああてはまる」35.7%を合わせて50.5%であったが、2013年度には58.6%と年々増加傾向にある

「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は大幅に減少傾向

Q13 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。

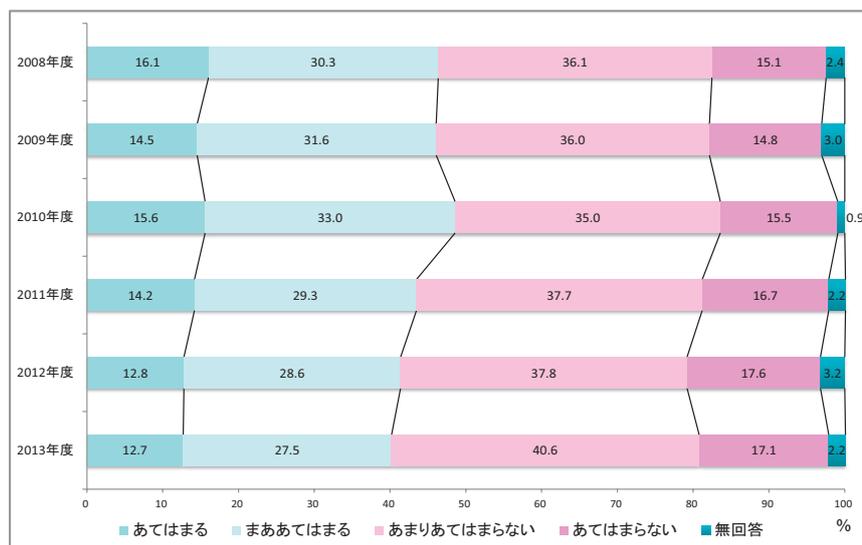
よく自分の専門以外の本を読んだ



大学時代を通じての経験については、年度ごとに経験している者の割合が低下している項目が多い。「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は2008年度には「あてはまる」30.2%、「まああてはまる」31.0%で合わせて61.2%であったが年々減少し、2013年度には「あてはまる」20.4%、「まああてはまる」30.8%で、合わせて51.2%と、6年間で約10%と大幅に低下している。

「社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ」者も減少傾向

社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ



同じように、「社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ」も、2008年度には「あてはまる」16.1%、「まああてはまる」30.3%で合わせて46.4%であったが、若干の増減はあるものの、年々減少し、2013年度には「あてはまる」12.7%、「まああてはまる」27.5%で、合わせて40.2%と、6年間で6%低下している。

「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合も減少傾向

議論したり考えたりする友達を得られた



同じように、「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合は、2008年度には「あてはまる」48.4%、「まああてはまる」40.0%で合わせて88.4%であったが年度ごとに増減はあるものの年々減少傾向にあり、2013年度には「あてはまる」36.1%、「まああてはまる」45.3%で、合わせて81.4%と、6年間で約7%低下している。

「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合も減少傾向

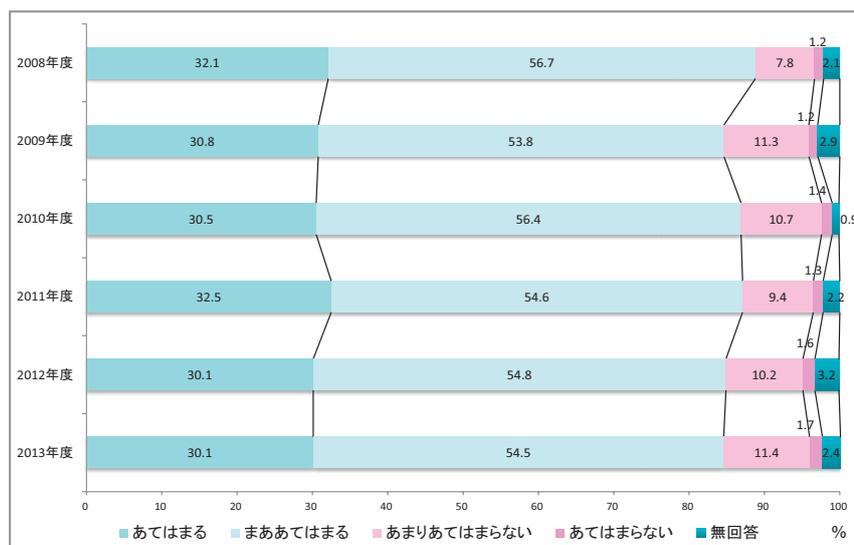
優れた友人に感心したり感化されたりした



「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合もやや低下している。2008年度には「あてはまる」62.7%、「まああてはまる」28.7%で合わせて91.4%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、傾向として年々減少し、2013年度には「あてはまる」53.1%、「まああてはまる」35.9%で、合わせて89.0%と、わずかではあるが、低下している。さらに、「あてはまる」者のみの割合では、62.7%から53.1%と9.6%の減少となっている。

「自分なりのものの考え方を得られた」者もわずかに減少傾向

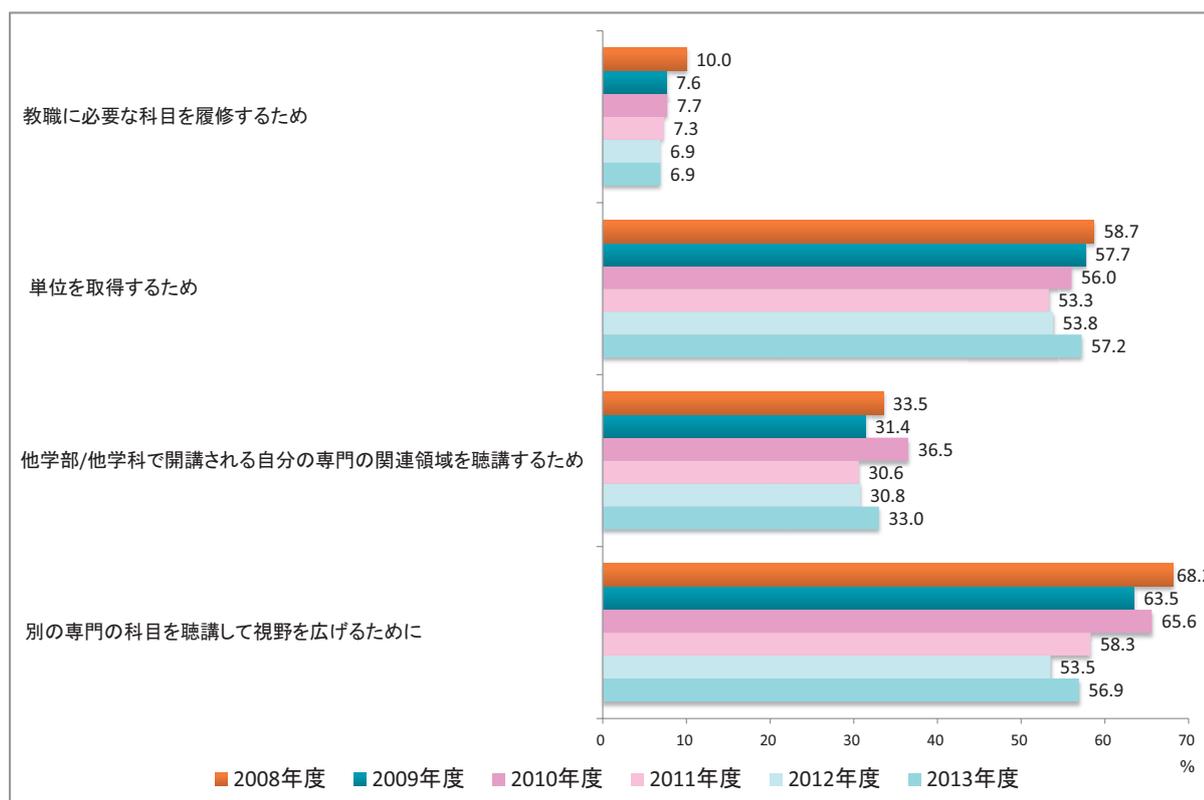
自分なりのものの考え方を得られた



同じように、「自分なりのものの考え方を得られた」者の割合もやや低下している。2008年度には「あてはまる」32.1%、「まああてはまる」56.7%で合わせて88.8%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、やや減少傾向にあり、2013年度には「あてはまる」30.1%、「まああてはまる」も54.5%と減少し、合わせて84.6%と、6年間で4%以上低下している。

「他学部聴講の目的」は「教職科目の履修」や「視野を広げるため」が減少傾向

SQ1. 他学部・他学科聴講を行った人にお聞きします。どういう意図で聴講しましたか。



他学部聴講については、受講率に大きな変化はないが、受講の意図については、「教職に必要な科目を履修するため」が2008年度の10.0%から2013年度は6.9%とやや減少している。また、「別の専門の科目を聴講して視野を広げるために」も2008年度の68.2%から2013年度には56.9%と11.3%ほど減少している。なお、無回答の割合が増加していて、このことも上記の項目の割合の減少と関連しているとみられる。

「進学先を希望通りに決めることができた」者はやや減少

Q24 進学振分けについてお聞きします。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。

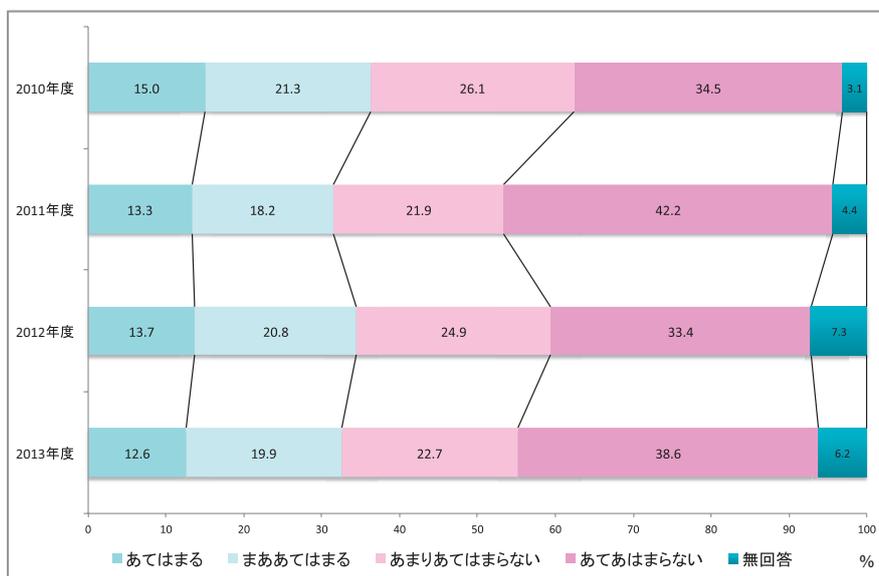
進学先を希望通りに決めることができた



「進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は「あてはまる」64.4%、「まああてはまる」23.2%で合わせて87.6%であったが、年々減少傾向にあり、2013年度には「あてはまる」60.2%、「まああてはまる」23.3%で合わせて83.5%となっている。特に「あてはまる」は2008年度の64.4%からほぼ一貫して減少し、2013年度には60.2%と約4%減少している。

「途中で興味が変わって進路希望を考え直した」者もやや減少

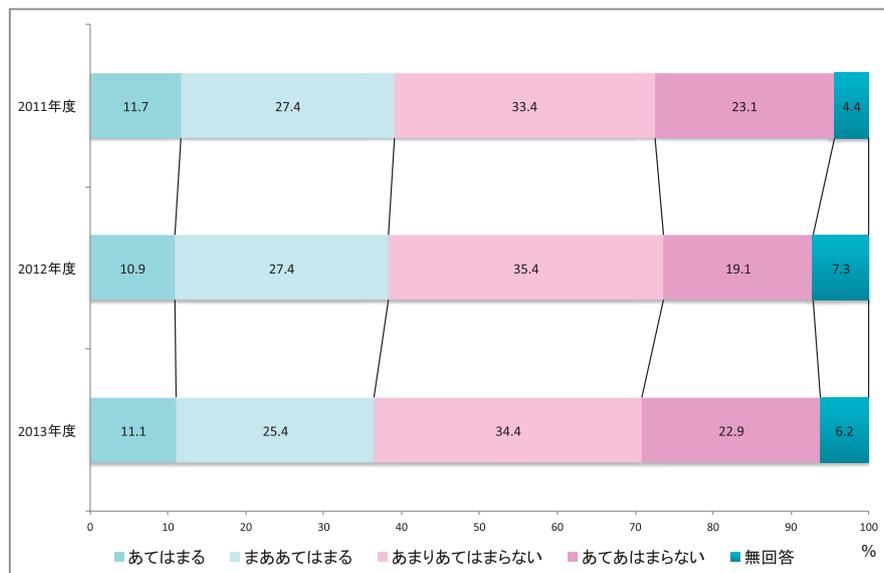
途中で興味が変わって進学希望を考え直した



「途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2010年度は「あてはまる」15.0%、「まああてはまる」21.3%で合わせて36.3%であったが、年々減少傾向にあり、2013年度には「あてはまる」12.6%、「まああてはまる」19.9%で合わせて32.5%となっている。特に「あてはまる」は2008年度の15.0%からほぼ一貫して減少し、2013年度には12.6%と約2%減少している。

「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者はやや減少

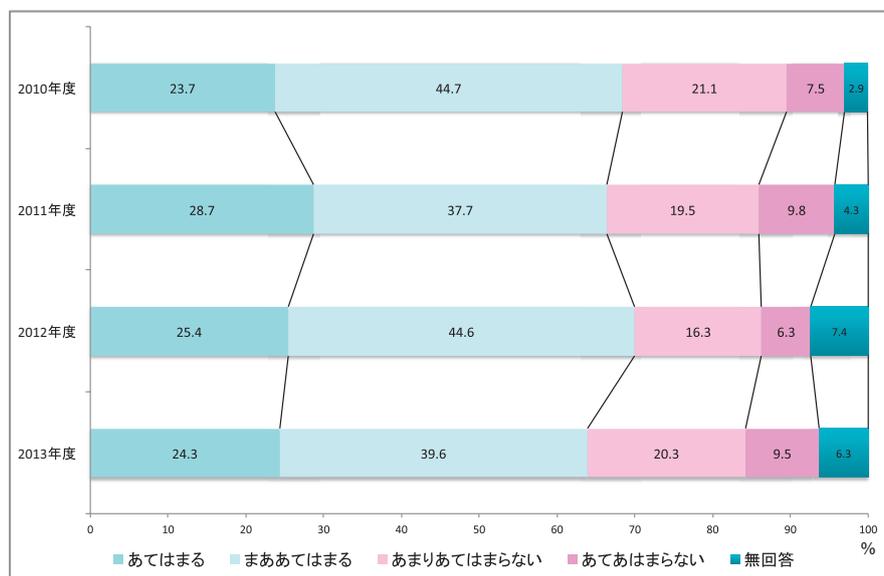
現在の進振り制度は複雑すぎる



「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者は、2011年度は「あてはまる」11.7%、「まああてはまる」27.4%で合わせて39.1%であったが、年々わずかに減少傾向にあり、2013年度には「あてはまる」11.1%、「まああてはまる」25.4%で合わせて36.5%と、大きな変化ではないが減少している。

「進学先はイメージしていた通りだった」者は減少傾向

進学先は進学前にイメージしていた通りだった

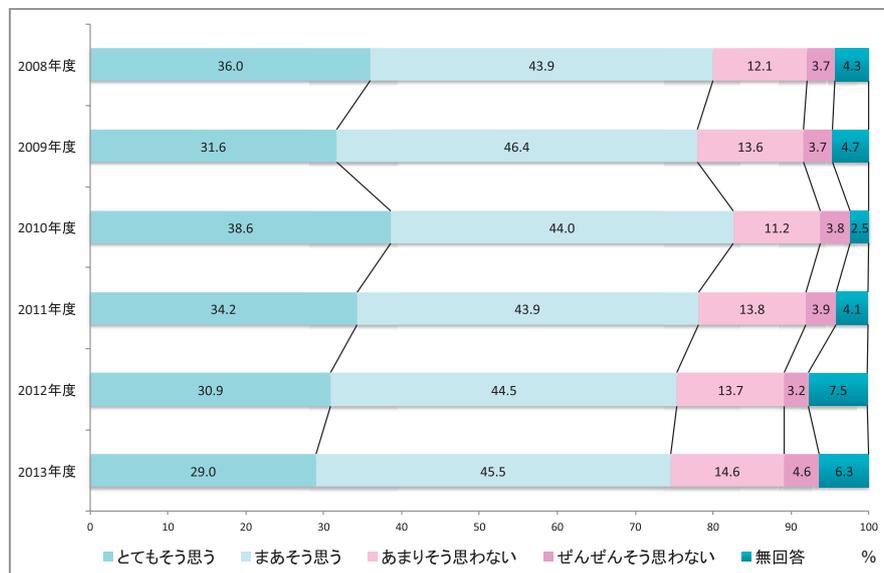


「進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、2010年度は「あてはまる」23.7%、「まああてはまる」44.7%で合わせて68.4%であったが、年度ごとに増減があり、2013年度には「あてはまる」24.3%、「まああてはまる」39.6%で合わせて63.9%とやや減少傾向にある。

「前期課程でいろいろ深く学んで、後期課程で専門を深める」現行方式の支持はやや減少

Q25 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。

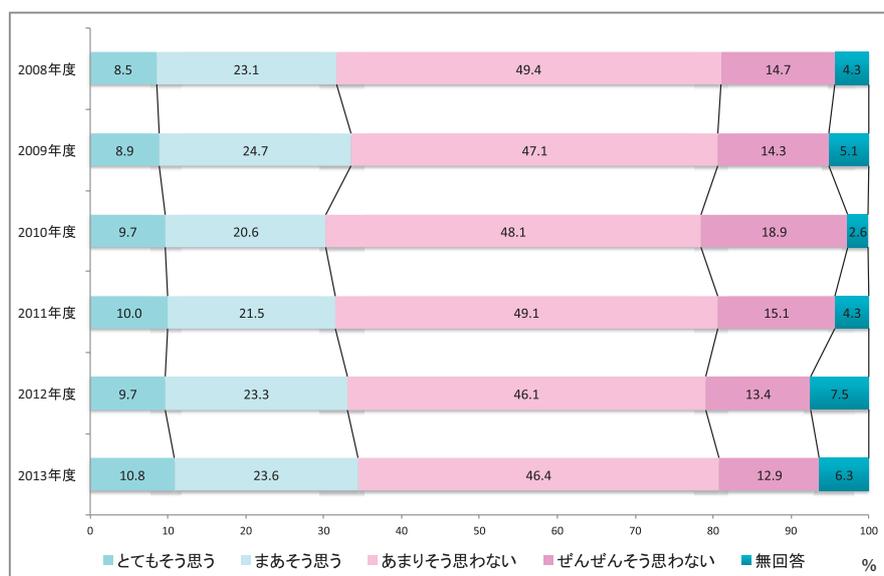
前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい



「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」36.0%、「まあそう思う」43.9%で合わせて79.9%であったが、2010年度の82.6%をピークに減少し、2013年度には合わせて74.5%とやや減少傾向にある。

「入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいく」方式の支持はやや増加

入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい



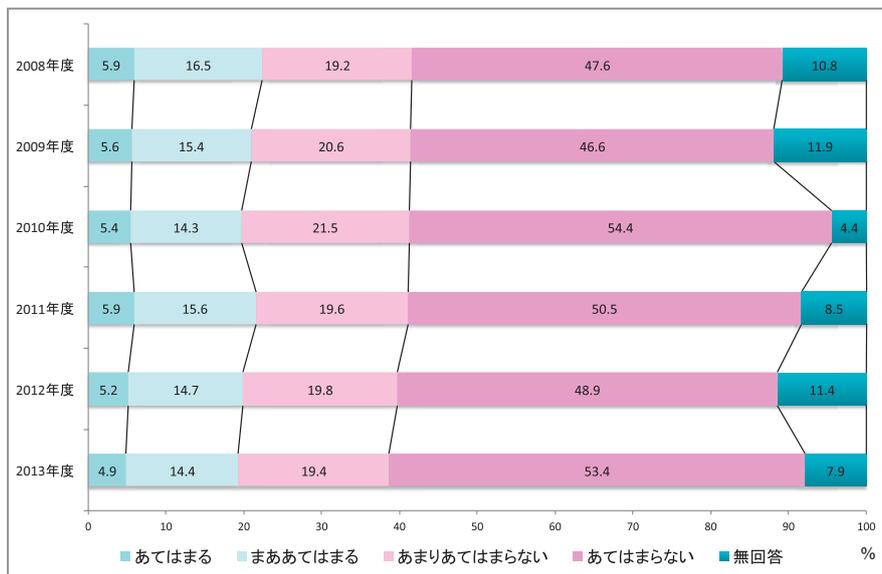
これに対して、「入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」8.5%、「まあそう思う」23.1%で合わせて31.6%であったが、2010年度にやや減少したものの、その後増加傾向にあり、2013年度には合わせて34.4%とやや増加傾向にある。

進路については、肯定的な傾向も否定的傾向も見られる

「就職活動のための十分な勉強時間が取れなかった」者はやや減少

Q28 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。

就職活動のために勉強の時間がとれなかった



「就職活動のために勉強の時間がとれなかった」者の割合は、2008年度は「あてはまる」5.9%、「まああてはまる」16.5%で合わせて22.4%であったが、やや年毎の増減はあるものの、2013年度には合わせて19.3%と減少傾向にある。

「厳しい就職活動になった」者もやや減少傾向

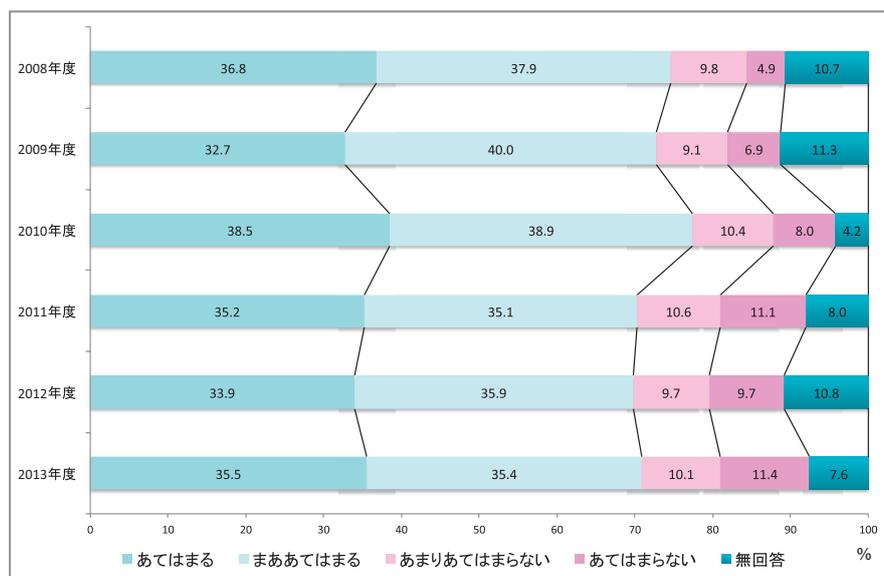
厳しい就職活動となった



「厳しい就職活動になった」者の割合は、2008年度は「あてはまる」5.8%、「まああてはまる」11.7%で合わせて17.5%であったものが、2009年度には25.1%と増加している。しかし、その後は減少傾向にあり、2013年度には21.3%となっている。

「満足のいく進路決定ができた」者はやや減少傾向

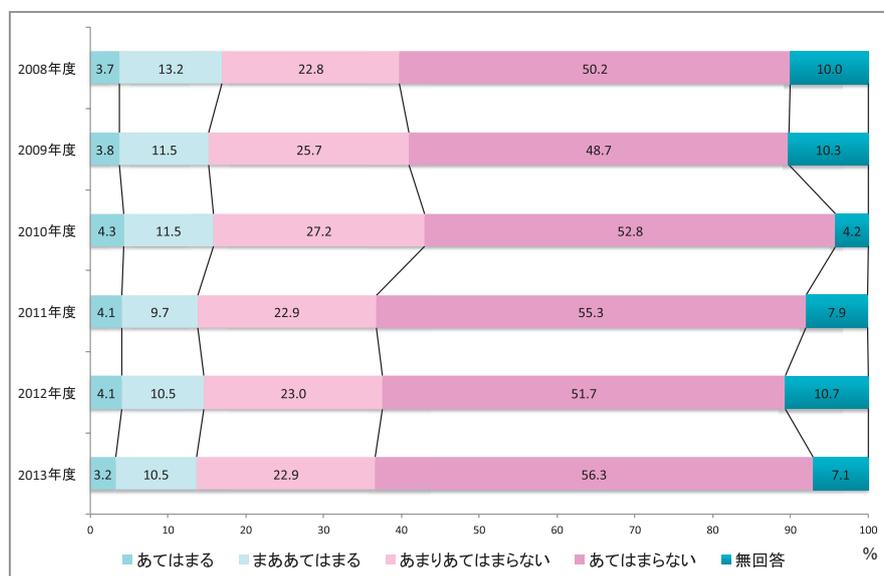
満足のいく進路決定ができた



「満足のいく進路決定ができた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」36.8%、「まああてはまる」37.9%で合わせて74.7%であったが、2010年度の77.4%をピークに減少し、2013年度には合わせて70.9%とやや減少傾向にある。

「大学の進路相談の機会が役に立った」者はやや減少傾向

大学の進路相談の機会が役に立った



「大学の進路相談の機会が役に立った」者の割合は、2008年度は「あてはまる」3.7%、「まああてはまる」13.2%で合わせて16.9%であったものが、年度ごとに増減はあるが、減少傾向にあり、2013年度には13.7%となっている。

ほとんどの場合、増加や減少の割合は小さいが、年度ごとに減少あるいは増加の傾向が明確にみられるものも多い。しかし、この傾向が続くのか、またいかなる要因によるかについては、引き続き検討が必要である。



この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、大学総合教育研究センターを通じて行ってください。

東京大学広報室

no. 1465 2015年3月18日

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学大学総合教育研究センター
大学改革基礎調査部門
e-mail : enq@he.u-tokyo.ac.jp